山鹿市立博物館調査報告書第11集

市内遺跡確認調査報告書

方保田東原遺跡周辺における水田遺構確認調査

1991

熊本県山鹿市教育委員会

序　　文

地域の時代と声高らかに叫ばれているが、地域が誇れるものを考えた場合何があるだろうか？全国各地で地域おこしの核となっているものは文化財である。地域で守り伝えた文化財こそ、そこに暮らす人々の誇りであり伝統であろう。埋蔵文化財も例外ではない、遺跡は我々の祖先が暮らした場所であり、埋葬された場所である。その地域の伝統や歴史を考えるときに遺跡の数の多さや質の高さが地域の歴史的な懐の深さを指し示している。

さて、このたび山鹿市では方保田東原遺跡周辺において生産拠点としての水田跡の確認調査を実施し、ここに報告書ができましたので皆様方にお届けいたします。発掘調査に際し地権者の方々をはじめ多くの人々に多大のご協力をいただきました、心よりお礼申し上げます。

最後になりましたが、本書が学術研究や、地域の歴史学習などに役立つことを願い、文化財の愛護の一助となれば幸いです。

平成３年３月

山鹿市教育長　　北　井　澄　生

例　言

1　本書は山鹿市教育委員会が国庫補助事業として実施した水田遺構確認のための実施した発掘調査報告書である。

2　発掘調査は山鹿市大字方保田地区に所在する方保田東原遺跡の周辺の低湿地を対象とした。

3　調査は山鹿市教育委員会が主体となり、山鹿市立博物館において実施した。

4　遺構の図は中村幸史郎、高橋道昭、北原美和子が行った。

5　遺物実測は宮崎歩、城葉子、小原朱実、大森ようこが行った。

6　写真は中村が撮影した。

7　本書の執筆および編集は中村が行った。

本　文　目　次

1　調査の目的 …… 1
2　調査の経過 …… 1
3　調査の組織 …… 8
4　調査地の環境 …… 8
5　方保田地区の遺構と遺物 …… 13
6　日の出地区の遺構と遺物 …… 32
7　まとめ …… 40

挿　図　目　次

第 1 図　方保田東原遺跡周辺地形図 …… 9
第 2 図　調査地区位置図 …… 10
第 3 図　方保田調査区地形図 …… 12
第 4 図　方保田調査区測量図 …… 14
第 5 図　調査区上層遺物出土状況実測図 …… 15～16
第 6 図　調査区下層遺物出土状況実測図 …… 17～18
第 7 図　調査区土層断面実測図 …… 19～20
第 8 図　調査区出土遺物実測図（弥生式土器） …… 22
第 9 図　調査区出土遺物実測図（土師器・須恵器ほか） …… 23
第 10 図　調査区出土遺物実測図（特殊な遺物・石器） …… 25
第 11 図　調査区出土遺物実測図（木製品） …… 26
第 12 図　日の出調査区地形図 …… 33
第 13 図　日の出調査区測量図 …… 34
第 14 図　調査区出土遺物実測図（Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ層出土） …… 35
第 15 図　調査区出土遺物実測図（Ⅵ層出土） …… 36

図　版　目　次

カラー

図版１－１　方保田地区調査区遠景（西側より）
図版１－２　調査区遠景（北側より）
図版１－３　調査区発掘状況
図版２－１　墨書土器
図版２－２　墨書土器
図版２－３　墨書土器
図版３－１　木札
図版３－２　横櫛
図版３－３　曲物底板
図版４－１　日の出地区調査区全景（東側より）
図版４－２　調査区発掘状況
図版４－３　内面に赤色顔料を塗った土器
図版５－１　方保田地区調査区全景（北側より）
図版５－２　調査風景（南東側より）
図版５－３　柵準備作業中
図版６－１　発掘調査風景
図版６－２　発掘調査風景
図版６－３　発掘調査風景
図版７－１　発掘調査風景
図版７－２　調査区西側土層状況
図版７－３　発掘状況
図版８－１　発掘状況
図版８－２　発掘状況
図版８－３　発掘調査風景
図版９－１　土錘出土状況
図版９－２　木札出土状況
図版９－３　木札出土状況
図版10－１　木札出土状況
図版10－２　木札出土状況
図版10－３　木札出土状況
図版11－１　横櫛出土状況
図版11－２　木片出土状況
図版11－３　木片出土状況
図版12－１　上層出土　弥生式土器・壷口縁部
図版12－２　上層出土　弥生式土器・壷、甕片
図版12－３　上層出土　弥生式土器・器台片
図版12－４　上層出土　弥生式土器・ミニチュア鉢
図版13－１　下層出土　弥生式土器・甕口縁部片
図版13－２　下層出土　弥生式土器・壷口縁部片
図版13－３　土師器　杯
図版14－１　須恵器　把手
図版14－２　土師器、須恵器、白磁
図版15－１　刺突文を有する把手
図版15－２　土錘
図版15－３　土錘
図版15－４　土錘
図版15－５　石器
図版16－１　くぼみを有する軽石
図版16－２　くぼみを有する軽石
図版17－１　日の出地区発掘状況
図版17－２　発掘状況
図版17－３　発掘状況
図版18－１　発掘調査風景
図版18－２　発掘調査風景
図版18－３　発掘調査風景
図版19－１　第２層出土遺物
図版19－２　第４層出土遺物
図版19－３　第５層出土遺物
図版20　第６層出土遺物

1　調査の目的

今回の調査は方保田東原遺跡周辺における水田遺構の検出を目的に２箇所の低湿地で調査を行った。調査は方保田東原遺跡の存在する方保田台地の周辺において水田耕作が可能な場所を選んだ結果、水田にされていなくて、将来も水田耕作をしない可能性の高い場所を必須条件とした。それというのも台地の裾部には今でも滾々と水が湧き出ている場所が数多く見られるため、われわれの調査後に再び水田として使えなくなる可能性を秘めているので地権者の方に迷惑をかけられないという制約を働かせたのである。このため方保田地区の大字方保田1554番地（所有者　迎田常男氏）と日の出地区の大字方保田2103番地（所有者　山口瑞子氏）に絞って調査を行うこととし、弥生時代の生活基盤である水田耕作の確認と、木器の検出を目指して調査を開始した。

なおこの調査の最中に方保田東原遺跡の中において縫製工場の増築工事に伴う緊急調査を実施する事となり、２箇所を同時に調査しなければならなくなったため調査員１名で対応できず博物館職員全員で事の対応に追われた。埋蔵文化財調査と博物館の展示活動を同時に行っているため多忙を極めた状態が続いており文化財愛護宣言都市にふさわしい体制整備が必要である。

調査に際して地権者の方々のご協力を得たことをここに記して感謝の言葉といたします。

2　調査の経過

1990年（平成２年）

11月１日（木）晴れ

いよいよ水田追跡調査開始である。方保田東原遺跡に伴う生産基盤である水田を確認し、当時の木器を検出することを目的としているため、あえて深田と呼ばれる部分の調査を実施することとした。それにしても水がよく湧き出る。おまけに沢蟹やマムシ等が出没している。

水処理のため排水路を巡らしていたが、殆んどヘドロ状の土がすぐに埋まってしまい思うように排水が行えず発掘まで至らないようである。明日は土置き場を設置し、より効果的に土を積み上げる工夫をしたいと考えている。

11月２日（金）晴れ

深田のため表土がかなり水分を含んでおり、廃土作業行っても、積み上げる事が困難と思われたので水田東側半分に柵（しがらみ）を造り積み上げる準備を行った。調査区

域は12m×12m＝144㎡で設定し、柵の西側に位置している。

11月５日（月）晴れ

３日夜の雨で２日表土を剥いでいた部分が完全に水没していたので、ポンプアップを行う。平行して水田南側の旧排水路の掘削を行い周辺の水はけを良くしようとしたが、なかなか効果が見られないようだ。水田調査区の表土剥ぎはぬかるみがひどく、思うように進まないで、多少疲れ気味である。表土は焼く20cm程度で、下から砂利層が顔を覗かせており、この面で広げていきたい。夕方から再度排水路の掘削を行った。この部分は朝方行った部分の東側でかなりの量の水が湧き出した。ここの水分が水田に流れているので、これを外へ流せば水田の水分が切れるものと思われる。明日以降はこの排水路を延長し、より多くの水を排除したいものである。

11月７日（水）曇りのち晴れ

本日より9日まで中村は岡山県総社市で開催される全史協（全国史跡整備市町村連絡協議会）参加、さらに12日まで九州大学で行われる日本考古学協会秋季大会参加のため出張し現場を離れたため、留守の間急遽山下が担当することとなった。

前日のポンプアップのおかげで調査区表面の水がかなり排出されたため表土剥ぎの能率も上がり、全体の３分の2は進んだ。また排水路掘削も終了した。排水路掘削時土器片多数出土した。

11月８日（木）曇り

表土剥ぎ作業が終了した。通常の作業の2倍時間を要した。これは表土が泥化しているため作業に支障をきたしたこと、雑草の根が強く張っている事等が考えられる。今後の水田発掘の対策等も立てておかなければならないと思う。なお、土置き場は満杯状態であり、当初予定していた土層別に分けて土を置く方法は無理のようである。

11月9日（金）雨

雨が降り出したため10時で作業を中止した。

11月13日（火）晴れ

中村は久々の現場である。耕作土はすでに除去されていたが、先日の雨のため調査区は深さ20cm程度水が溜まっていたため、朝からポンプアップを行う。作業員には調査区域内側に排水溝をめぐらすため幅30cm、深さ30cm程度の溝掘りを実施した。その結果、かなりの水が集まり、内部の土の状況も作業し易くなった。

午後からは第３層に礫層が確認されているので、南側から礫層の露出作業に移行した。

午前10時頃より中村と北原は平板測量に移り、200分の１のスケールで地形測量を実施し始めた。しかし、午後より中村が北部町へ会議（豊前街道沿い文化財担当者会議）出席のため、明日以降本格的な作業となった。なお、ポンプアップを行うには水の量が少

ないが、常に水が流れているので我が家から水道ホースを持参し排水作業を試みたが、うまくできなかった。礫層には弥生土器や須恵器を含むところから、この層は二次堆積の可能性が高く、この層の下に包含層が存在する可能性が残されている。

11月14日（水）晴れ

排水溝からあふれた水は調査区内の一部に広がっていたため、ポンプアップを朝から行った。その後礫層の露出作業を行ったが水分が滲み出したため周囲に巡らしてる排水溝を再び掘り下げた。なおホースによる排水もなかなかうまくいかず再三再四にわたりエアー抜きを行った。礫層上部では木片２点が出土し加工痕が見られるが、時間的位置付けは困難である。

11月15日（木）晴れ

廃土用土置き場が手狭になったため、これまでの柵の上に積み上げる方法を行った。その後遺構検出作業を行い弥生土器片や土錘、石核（黒曜石）等が出土している。これらは、礫混じり黒色土層を中心とした面で集中して出土している。昨日からホースによる排水施設を設置しているが、比較的効果を挙げているといえよう。朝から排水溝内でのみ水が溜まっているだけで、調査区内にまでは達していなかった。しかし、昼間には水がひどく濁ってしまうので流れが悪く、何度もエアー抜きをしなければならなかった。

11月16日（金）晴れ

ここ数日朝から濃い霧に覆われ、秋の朝にふさわしい風景が見られる。午前中から正午にかけて熊入地区（カルチャースポーツセンター）に置いていたユニットハウスを移設した。午後は遺構検出を行ったが、馬の蹄鉄や陶器類が出土しており今後本質に近付く事と思われる。

11月19日（月）曇り

中村は午前中鹿児島県曽於郡大崎町の文化財保護委員４名視察対応のため博物館に出かけた。そのためおじさん達に作業をお願いし、遺構検出とレベル移動を行ってもらっていた。遺構検出は僅かに畦畔らしく礫層に変化が見え始めているが、遺物は瓦の破片等が混入しており、時期の決定も困難である。

レベルは方保田の神社前に水準点25m77cmがありここから移動した。午後から平板測量を行い、明日からの雨対策を講じて夕方作業を終了した。

11月21日（水）晴れ

一昨日夜からの雨もようやく上がり、調査区内は水浸しの状態であった。ポンプアップの後周囲に巡らしている排水路を掘り下げてもらう。午後からようやく遺構追跡調査を開始したが今日までのところめぼしいものは見られない。一昨日までの天候とは打って変わって冬型の天気となった冷たい風が吹きさらす中での作業は身にしみる様だ。特

に一日中陽が当たらない場所で水は多いしこれから先が思いやられる。

11月22日（木）晴れ

博物館職員の父親が亡くなったため朝から午後3時までの間博物館応援に出かけたため、おじさん達に再び任せてしまった。

遺構検出作業は２回掘り下げを実施したが、現在までの状況では未だ目ぼしいものは見られない。遺物もようやく現代物が出なくなっており、これから少しピッチを上げて行きたい。今日は甑の把手が１点出土していた。

11月23日（金）晴れ

今日は本来休みであったが、博物館でハニワ教室を行うため出勤としたため、おじさん達にお願いして現場を実施した。遺構検出ではこれといって変化は見られないが、遺物では寛永通宝１枚が出土している。

11月28日（水）曇り

26日夜から27日朝にかけて雨が降ったため5日ぶりの現場である。そのため調査区内には水が溜まっており作業に困難をきたした。

午前中は日の出地区の地権者が八女市在住のため数日前から連絡していたが、ようやく発掘承諾書が送られてきたのでユンボの手配に走り回った。午後からようやく見やすくなったため畦畔らしき土層の変化が見られるが、時間的位置付けは困難である。

11月29日（木）曇りのち小雨

調査区内の排水がうまくいっておらず朝からポンプアップを行う。その間水分が多く作業ができなかったので日の出地区（大字方保田2103番地）調査予定地の草刈を行う。

ここ10余年まったく手がつけられない状態で全面にセイタカアワダチが繁茂していた。全員で草刈を実施した。この土地は東西方向に長く、半分からやや西寄りには水源地が存在しこんこんと水を噴出していた。

方保田地区ではようやく水田面と畦畔が明らかになった。昨日まではぼんやりとしていた畦畔がはっきりと見え始めたのである。これまで２本確実に存在していたことが判明、さらに１本存在する可能性が高い。これまでは作業員の掘り方の違いで土色の変化（水分の発色）が生じているのかと思っていたが、今日は明らかに土の違いによるものであることが確認された。これらの遺構の時期については不明であるが、今後土層断面も併せて確認していきたい。

11月30日（金）曇りのち小雨

季節外れの台風28号の影響で時折強い西風が吹き抜けていく。

方保田地区は昨夜からの雨で調査区は水浸しになっていた。ポンプアップを行うがとても作業できる状況ではなかったので、急遽日出地区に移動し作業小屋およびトイレの設

営と排水路掘りも行った。おじさん達が巧みに竹を組み合わせて小屋組を行い、壁には笹と茅を利用した立派なものが出来上がった。３時からは方保田地区に戻り、作業を行う予定であったが強風で現場小屋のシートが吹き飛ばされていたので、急遽修理と囲いを作った。結局一日建設工事ばかりであった。

12月１日（土）曇りのち雨

朝から賃金支払い関係で博物館へ書類一式持参した。しかし担当不在のため11時過ぎまで動けず留守番をせざるを得なかった。その間おじさん達には調査区周辺にめぐらしていた排水溝の掘り下げと壁面の土層検出を行ってもらう。正午近くから雨が降り始めたことと、来年度予算要求の教育長との打ち合わせが正午からあることが重なって、作業は午前中で終了した。

12月４日（火）曇りのち晴れ

中村は館長の代理として市議会出席のため午前中現場を離れる。そのため館から山下君に来てもらい作業を進めた。

先週までに土層断面を露出していたが、基本的には4層まで分類でき、さらに細分化できるものと思われる。そのため、平面で畦畔の確認を行うと共に断面との比較ができるものと思う。午後からは中村、山下の２名で地形測量をおこなう。

12月５日（水）晴れ

久々に冷え込んだ朝で、現場には霜が降っていた。方保田地区は排水ホースがうまく作動していて夜の間にはあまり溜まっていなかった。そのため作業もスムーズに開始できた。

土層断面と平面における遺構の検出を行ったが、礫層と泥層とのラインを出すには至らなかった。しかし何となくぼんやりしたラインが見えそうである。サンチェリー工業増築に伴う発掘届け作成および地権者同意書をサンチェリー工業にもらいに行く。

12月６日（木）晴れ

午前中はサンチェリー工業増築に伴う発掘届の作成起案と定例会出席のため現場を離れていたので、調査区内の排水路の掘り下げをしてもらった。礫層から磨石と加工痕のある木片が出土していた。午後は出雲建設とサンチェリー工業発掘に関しユンボ使用について話し合い近々開始することとなった。調査では未だ水田面の確認は出来ないが礫層上より木片が出土しているので今後に期待できる。おばさんもかなり掘り方が上達しており自己研鑽に勤めているようである。

12月７日（金）晴れ

なかなか水田面が出ない、黒色土層を全面掘り下げることによって遺構の検出を図りたい。午前中はサンチェリー工業と調査開始時期について話し合い、２月には工事着手

したいので１月までには調査終了の要望が告げられる。午後は建設省と坂田川メガネ橋保存について協議する。

12月８日（土）晴れ

サンチェリー工業増築部分の表土剥ぎを行う前に本山建設黒田氏と共に杭打ちを行う。

12月10日（月）晴れ

昨夜からの雨で調査区が水没したためサンチェリー工業の表土剥ぎを行う。新人17名を加え総勢30名での作業となった。

12月12日（水）晴れ

方保田地区でようやく砂礫層を出すに至った。この層の上面から木片が1点出土しているが木札状のものである。木簡にはならないが小さな穴が2個見られる。

サンチェリーではユンボとダンプ2台で表土剥ぎを行っている様である。

12月14日（金）くもり一時雨

黒色土堀下げを行う、砂礫層がようやく顔を出しはじめ青色を呈している。この落ち込みは旧河床の可能性が高い。

12月15日～28日　この間はサンチェリー工業の調査に専念したため作業を行っていない。

平成３年

１月８日（火）くもり

方保田地区は調査区全面に水が溜まっており、昨日午後からポンプアップを行っているが本日午前中までかかったので全員で日の出地区に移動した。

調査区は東西15m、南北10mの150㎡を設定し東側から表土剥ぎを行っている。今日までのところ３分２程度表土剥ぎが終了した。

１月９日（水）晴れ

日の出地区　午前中で表土剥ぎを終え２層目を剥ぎ始めたところで水が湧き出した。そのため東側に幅30cm深さ30cmの溝を掘り集水を行った。

１月10日（木）晴れ

２層目を約30cmの深さで掘り下げる。東側の集水溝に水があふれていたためポンプアップを行った。２層目はあと５mで終了しそうである。これまでのところ遺構らしいものは見られない。

１月17日（木）小雨のち晴れ

朝から雨が降っていたためサンチェリー工業の調査は中止し日の出地区に集中した。西端部では10日の作業の残り部分の掘り下げ（第２層）と東端部から第3層の堀下げを実施した。この段階で水田排水用の暗渠が埋設されている事が判明。これは終戦後行った

ものと前川誠一氏の話であった。

１月18日（金）晴れ

調査区の南側を幅３ｍで排水路との間を30㎝幅で土手を残して掘り下げた。水分が多く作業がしにくくなってきた。

１月19日（土）くもり

本日は休みであったが出勤して作業を行う。昨日残しておいた土手を取り壊し排水路の拡幅を行う。

１月23日（水）晴れ

調査区内が泥沼化しており、作業員の疲労が目に見えてきた。急遽機械を導入して彫り下げを行うこととした。

１月29日（火）晴れ

雨も手伝ってなかなか調査できる状態に至らなかったが、ようやくまともに作業できる環境が整ってきた。現在第５層を掘り下げており土師器と須恵器を主体に遺物が出土している。古墳時代の層であろうが水田面の確認には至っていない。

１月30日（水）晴れ

今日はサンチェリー工業の調査と掛け持ちで４往復し大忙しの日であった。今日までのところ西北部に僅かながら畦畔らしいラインが東西方向に数ｍ伸びているのが観察された。

２月１日（金）晴れ

第５層の下から第６層上面にかけて削平した。５層では鉄分を多く含んでいるため茶褐色をしている。６層は灰色を呈している。この違いが水田の形を示しているか否かについては明らかでない。

２月３日～３月12日　この間サンチェリー工業の調査に専念したため調査を中止していた。

３月13日（水）晴れ

昨年12月10日から始まったサンチェリー工業の調査がようやく実測のみの段階に入ったため久々の調査再開である。

方保田地区　礫まじりの土層を一皮剥く作業を行ったが全体の３分の１程度を終わった。

日の出地区　表面のノロを除去し一部で掘り下げた。しかし十分乾燥していないため作業は困難を極めている。

3　調査の組織

調査主体　山鹿市教育委員会
　　山鹿市立博物館
総　括　　北井澄生（山鹿市教育長・山鹿市立博物館長）
調査事務　次木　万里子（主任主事）
調査担当　中村　幸史郎（副館長）
　　大森　勲（主事）
　　山下　透（技師補）
　　永田　臣司（主事補）
作業員　　飯田民子、飯田ミツ子、飯田ツヤ子、飯田真一、石橋アサコ、井上秀実
　　奥村千鶴子、奥村泰子、鹿子木勇、鹿子木アヤオ、北原美和子、木庭イツコ、
　　高橋道昭、高橋信子、竹下泰行、立山翠子、中井亀一、中村キヨコ、
　　野田辰起、福山陽子、福山千代美、福山ツタエ、福山須美子、前川誠一、
　　松本定、吉井新助、吉田利春、吉川陽子、若杉ミチ子、若杉美也子
整理作業　城　葉子、小原朱実、大森ようこ
協力者　　迎田常男　山口瑞子　若杉久

4　調査地の環境

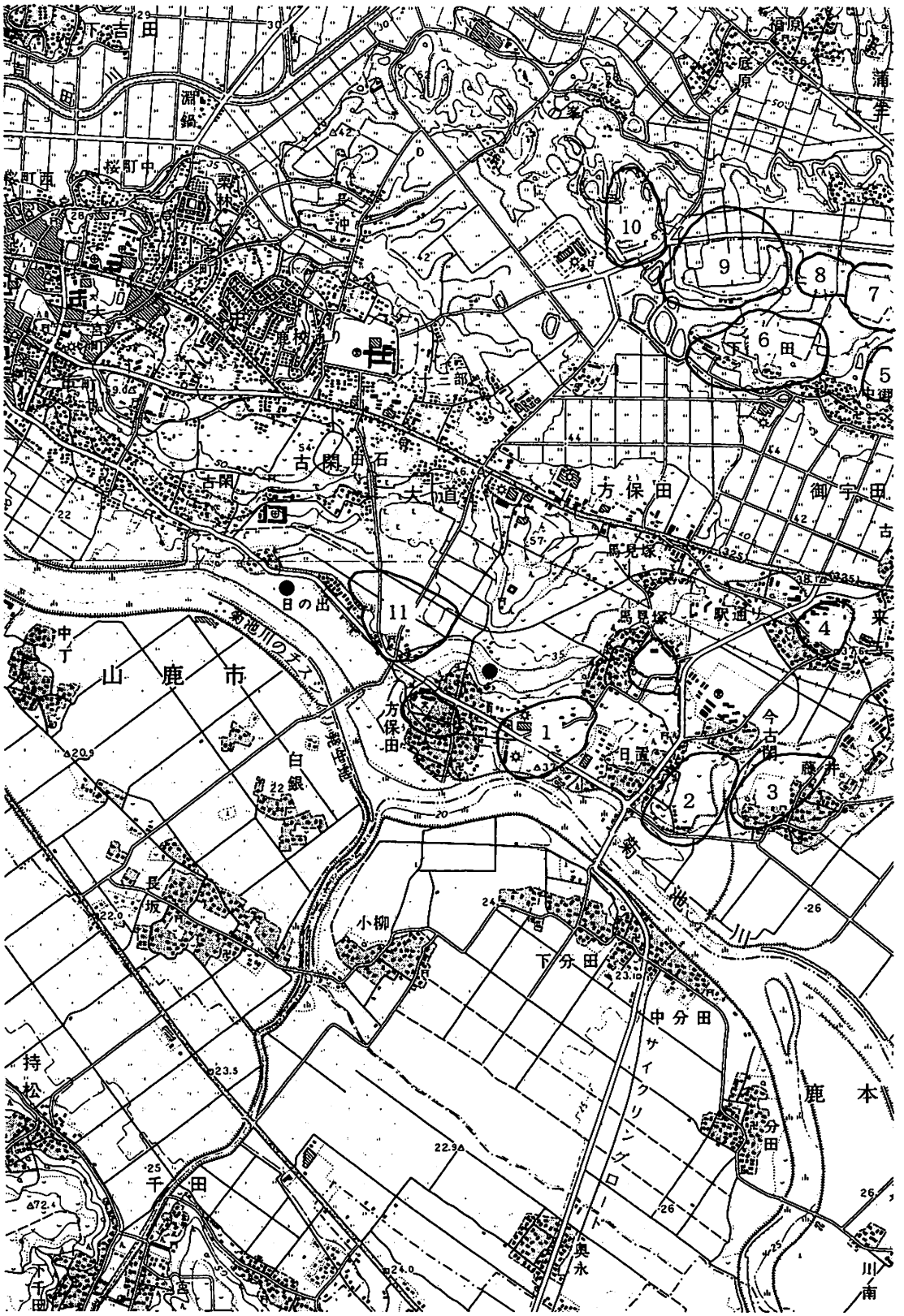
山鹿市は熊本県北部に位置した面積87.44km²、人口約34,000人の田園都市で古くから温泉地として賑わっている。

市内を西に流れる菊池川は、阿蘇外輪山西麓の菊池渓谷に源を発し全長61.2kmで菊池市、山鹿市、玉名市と流れ有明海に注いでいる。この川には65の支流が流れ込み総延長は326.96kmで球磨川、緑川とならんで熊本県下最大級の河川である。

山鹿市が位置する中流域では海抜20m程度で支流の多くが集まっており、熊本県北部で降った雨の殆どがこの地域に流れ込んでいる。加えて下流域との間には山間部が在り、毎年梅雨期には洪水が絶えなかった。そのため菊池市から山鹿市の間には東西15km　南北２kmの氾濫原が形成され「茂賀の浦三千町」として古くから重要な穀倉地帯になっている。

さて、菊池川流域における遺跡の在り方について概観してみることにする。

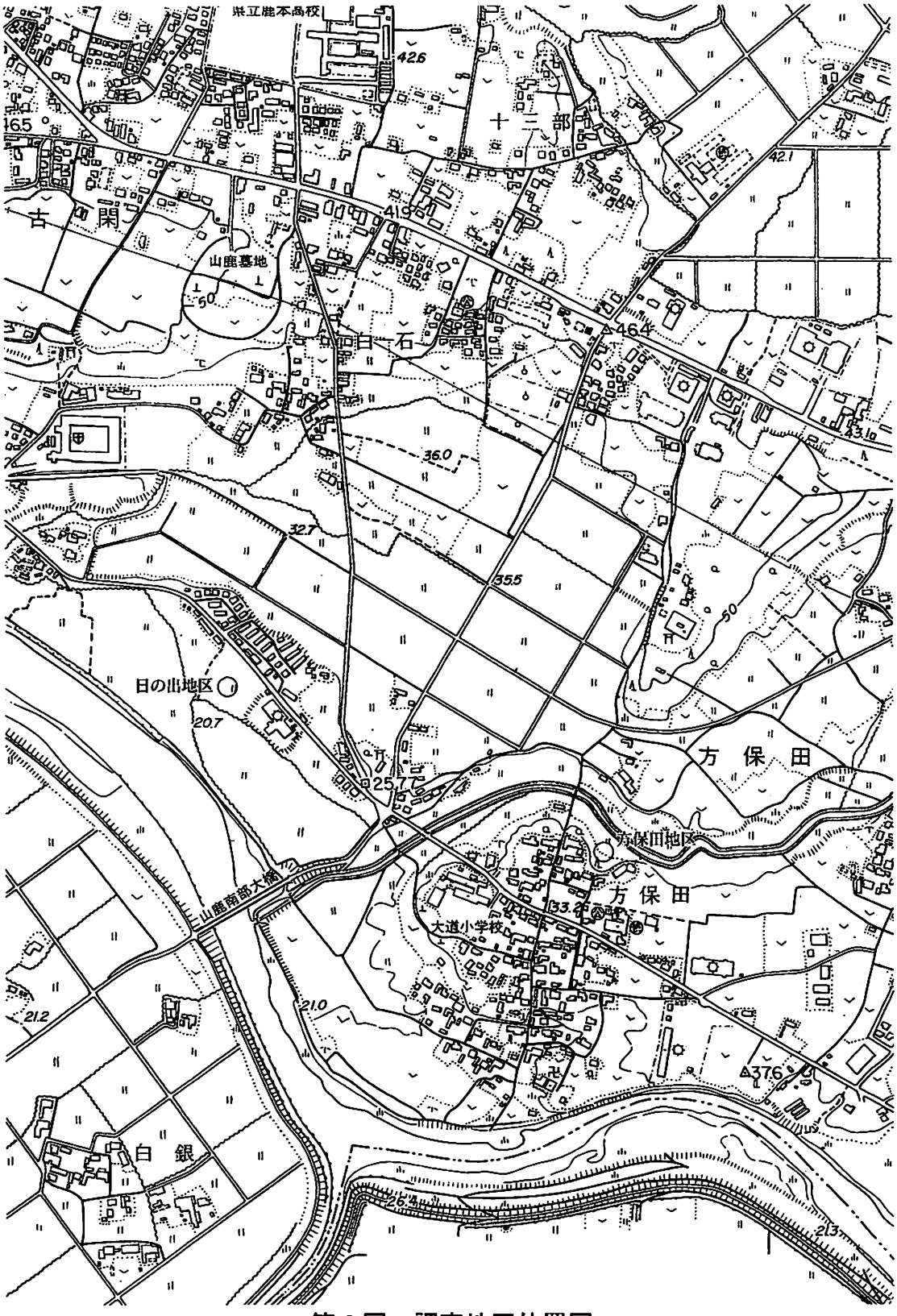
上流の阿蘇外輪山西側山麓ではこれまで詳細な調査がされていない事にも起因するが、大規模な遺跡は確認されていない。菊池市街地から山鹿市街地までの中流域では氾濫原



第１図　方保田東原遺跡周辺地形図

● 調査地点

0　500　1000m



第２図　調査地区位置図

0　500m

およびその周辺において多くの遺跡を見ることができる。

上流側から見ると菊池市の外園遺跡は熊本県で最初に貨泉を出土した遺跡で、中国大陸との交流を考える上で重要な遺跡と言えよう。

熊本県の調査であるが、七城町の台（うてな）遺跡でも貨泉を出土している。南に迫間川と菊池川を、西に内田川を見下ろす標高80mの台地上に位置しており、排水路及び道路内の調査であったため環濠のみの確認に終わっている。

同じく七城町の小野崎遺跡は北に菊池川、西に合志川を見下ろす標高60mの台地上に位置している。

鹿本町の津袋大塚遺跡は内田川の西側に位置し溝状遺構と多量の土器を出土しているが、詳細な遺跡の把握には至っていない。

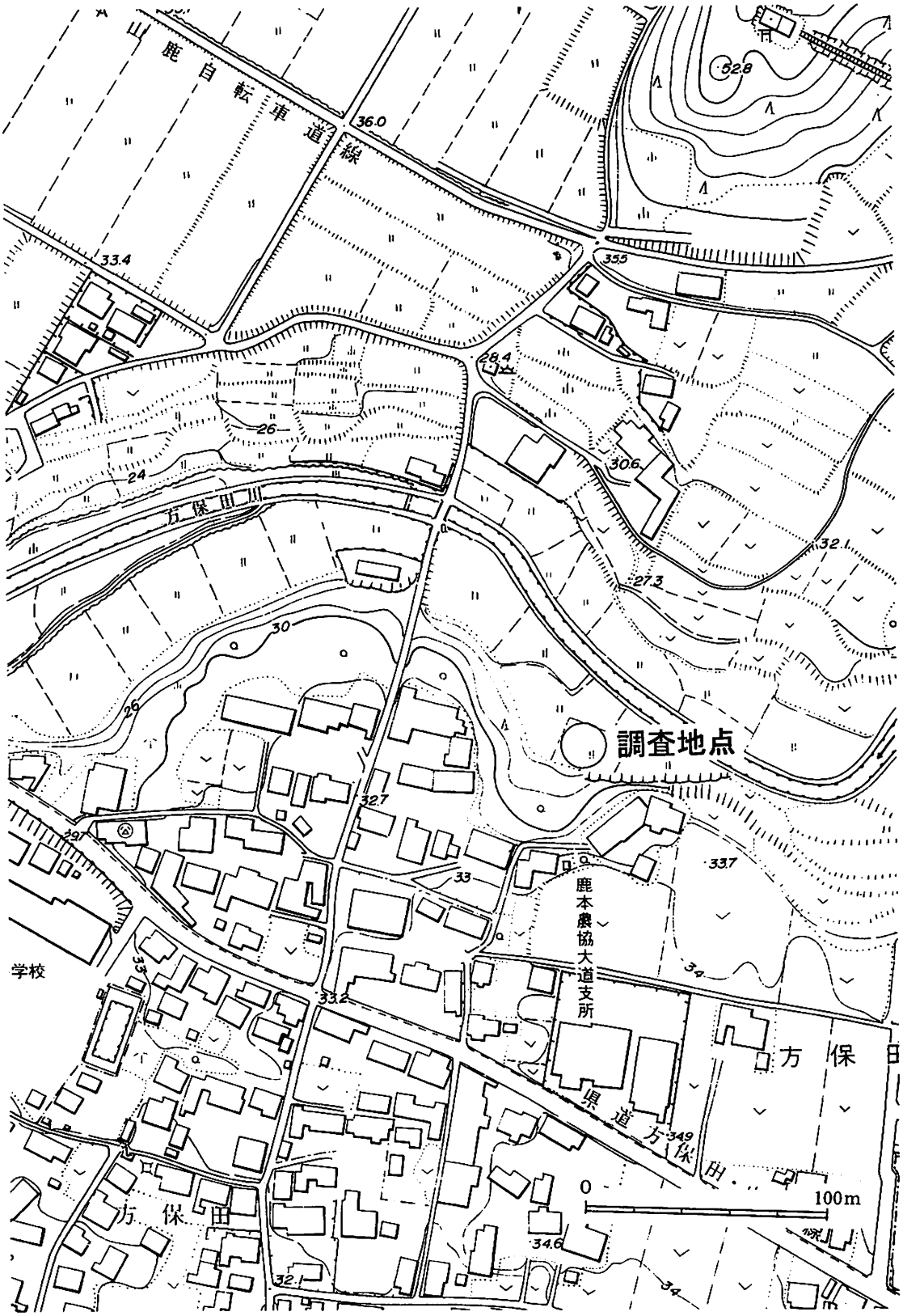
下流域は菊水町の諏訪原遺跡が見られ、未だに全容は明らかになっていない。

方保田東原遺跡(1)の東側には日置遺跡(2)、北原遺跡(3)が広がり、共に土器の散布が確認されている。北東側には銅矛を出土した県立鹿本商工高校内の地園遺跡(4)、北側の御宇田台地上には乙丸遺跡(5)、西久保遺跡(6)、御宇田妙見遺跡(7)、御宇田虎ヶ迫遺跡(8)、中尾・下原遺跡(9)、八の峰遺跡(10)等が存在している。

西側では方保田遺跡が広がっている。南側の氾濫原では弥生時代の遺跡の確認は出来ていないが、時折工事に際し地下２ｍで土器が出土ということで報告が有る所から考えて、遺跡が埋没し遺物が河川の氾濫等で流されている可能性もある。現在水田面として利用されているが現実には調査できない状況である。

方保田東原遺跡はこの氾濫原を見下ろすように菊池川中流域の右岸に発達した標高35m～40mの河岸段丘に立地しており、山鹿市大字方保田字東原を中心に広がっている。遺跡がある台地は東から西に延びる舌状台地を呈しており、南に菊池川、北にはその支流の方保田川に挟まれ段丘西側で合流している。

今回調査対象としたのは方保田東原遺跡周辺における水田耕作の痕跡と農具などの木器を確認したいとの狙いであえて低湿地を調査地として選んだが、１箇所は方保田地区と称し方保田東原遺跡の北側に流れる方保田川沿いと、もう１箇所は日の出地区と呼んだ日の出団地前の低地で菊池川沿いの２箇所とした。



第３図　方保田調査区地形図

5　方保田地区の遺構と遺物

方保田川左岸の山鹿市大字方保田1554番地の水田を調査対象とし、地形に合わせて調査区を設定したためやや菱形になった。縦12m、横12mで面積144㎡の調査区を設定した。廃土置き場が狭く西側半分に柵をつくり立体的に土を積み上げることとした。

遺構

ここではこれといった遺構は確認できず、旧河川の流路の一部が見られた程度であったが時間的な位置付けはできなかった。

層位は浅く礫層の堆積を基準に粘土層との境が河川の河床に見えた。

第５・６図に示すように調査区の南側から北側に向かって傾斜しており調査中は水田の畦畔かとも考えたが結果的には方保田川の左岸が確認できた。

第７図の土層断面図は調査区北側の東西断面土層で、基本的な層序は以下のようになっている。

基本層序

Ⅰ層　表土層

Ⅱ層　灰色土層（礫混在）

Ⅲ層　黒色土層

Ⅳ層　白色砂礫層

Ⅴ層　砂層

Ⅵ層　礫層

第７図は調査区の東側の南北断面図土層図で、基本的な層序は以下のとおりである。

Ⅰ層　表土層

Ⅱ層　灰色土層（礫混在）

Ⅲ層　黒色土層

Ⅳ層　白色砂礫層

Ⅴ層　砂層

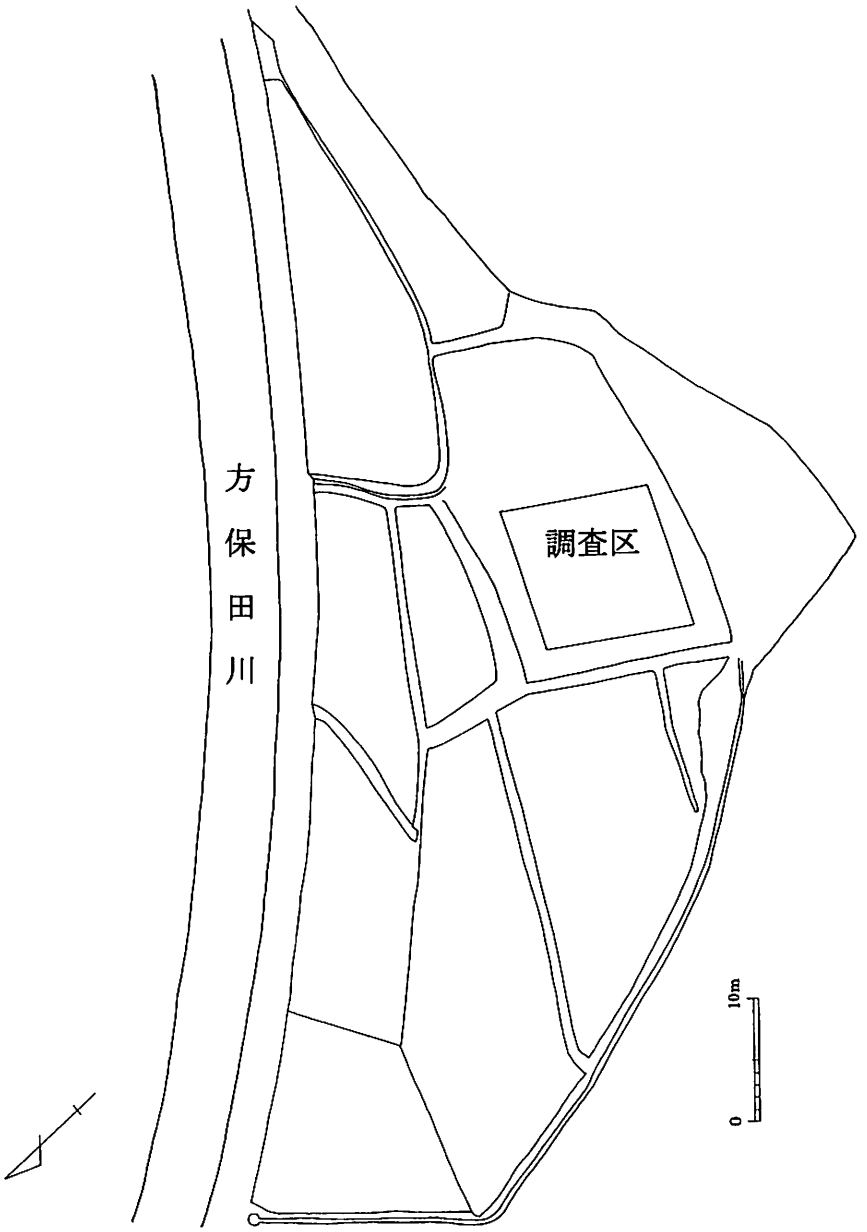
Ⅵ層　礫層

Ⅶ層　赤色粘土層

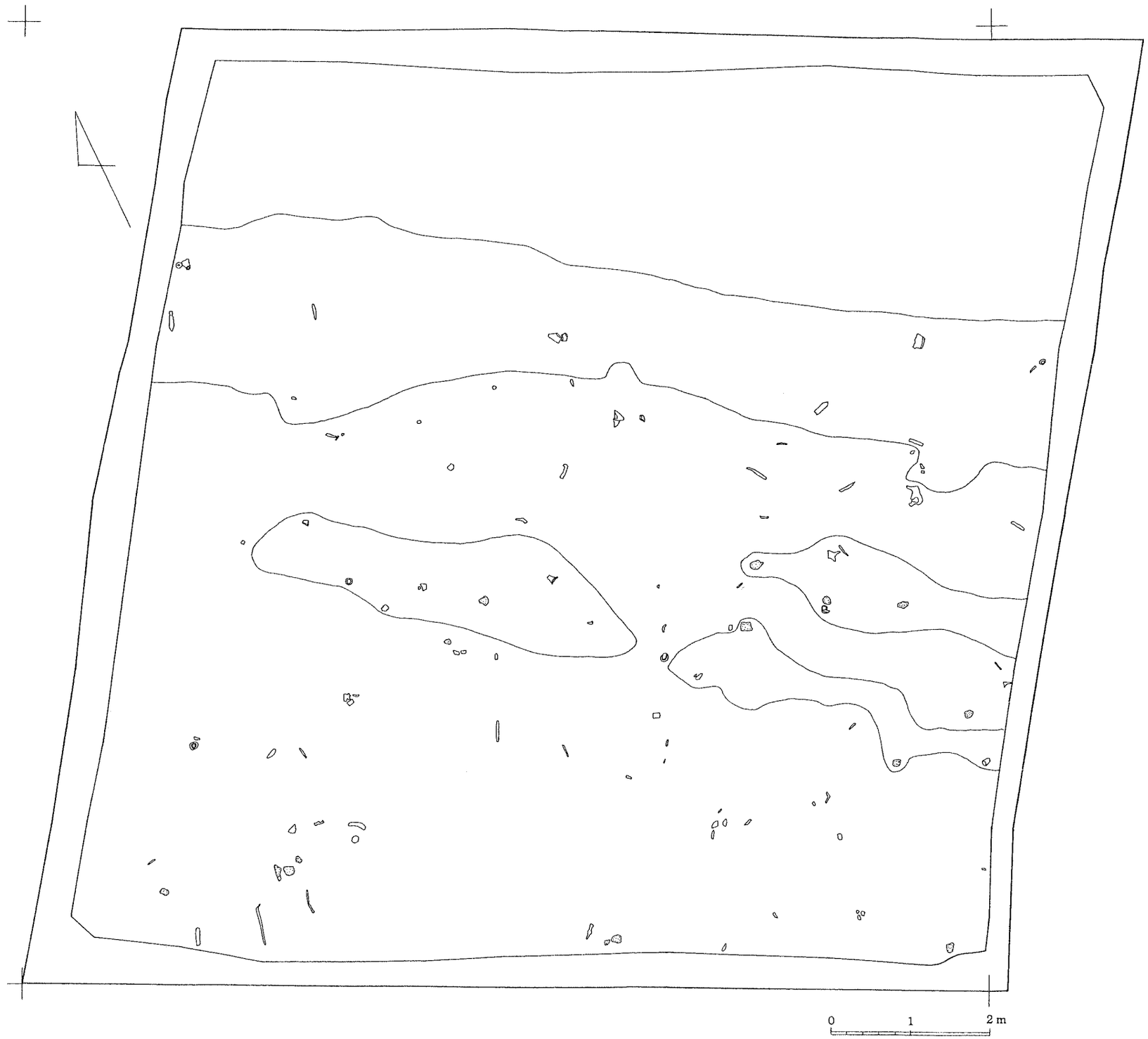
Ⅷ層　砂利層

Ⅸ層　赤土層

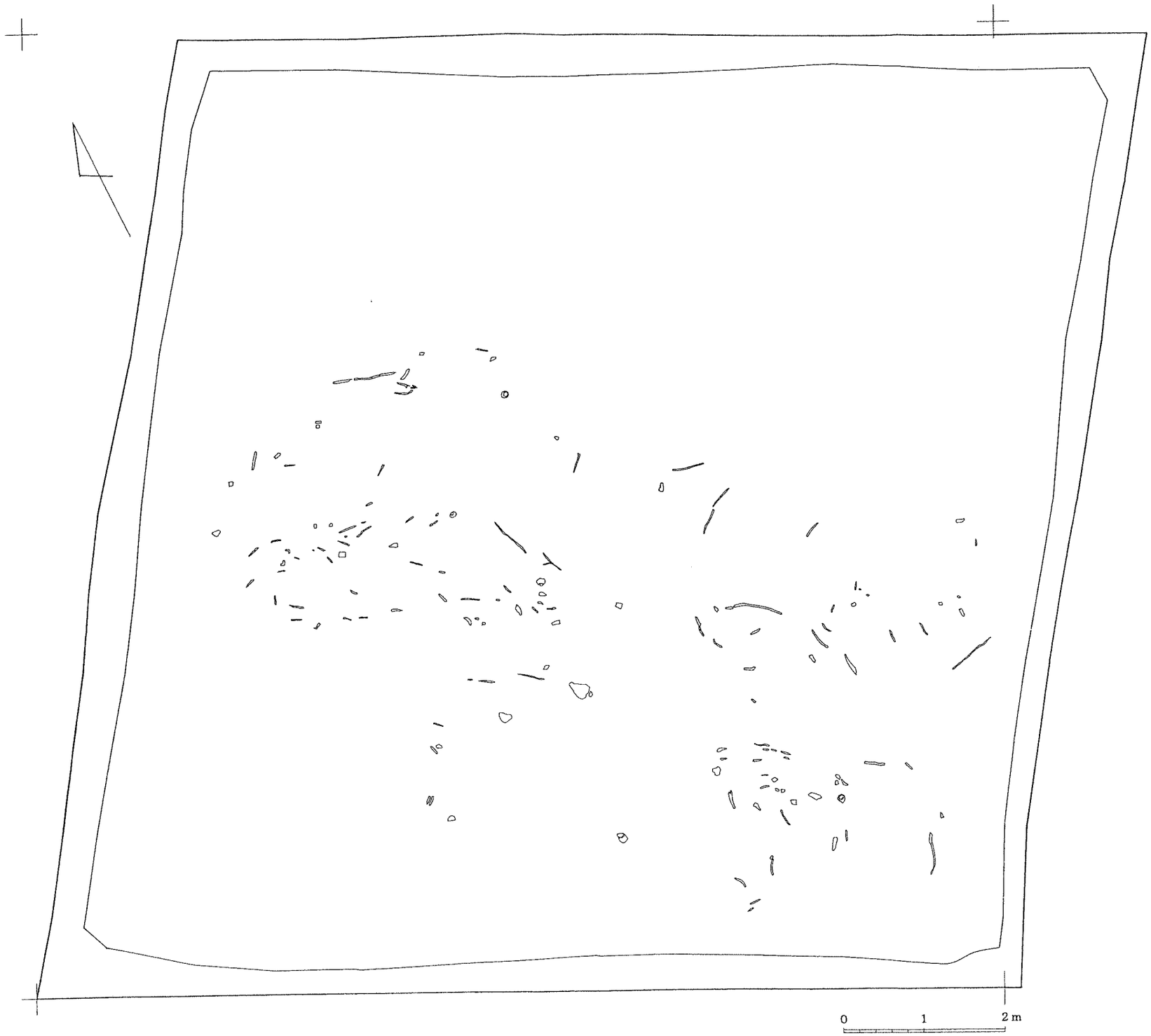
Ⅹ層　礫層



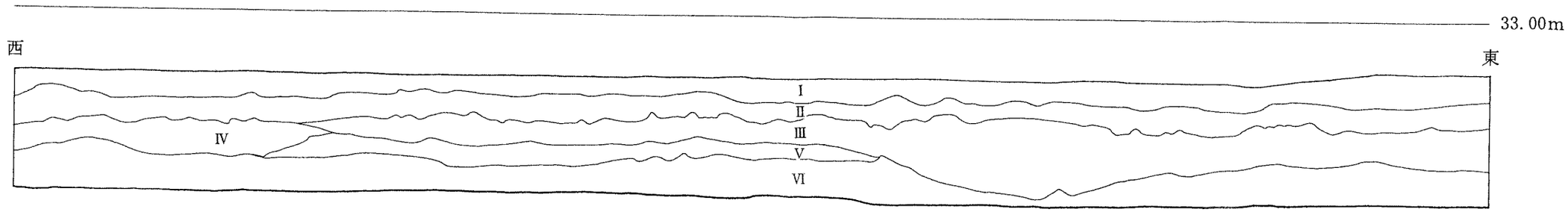
第４図　方保田調査区測量図



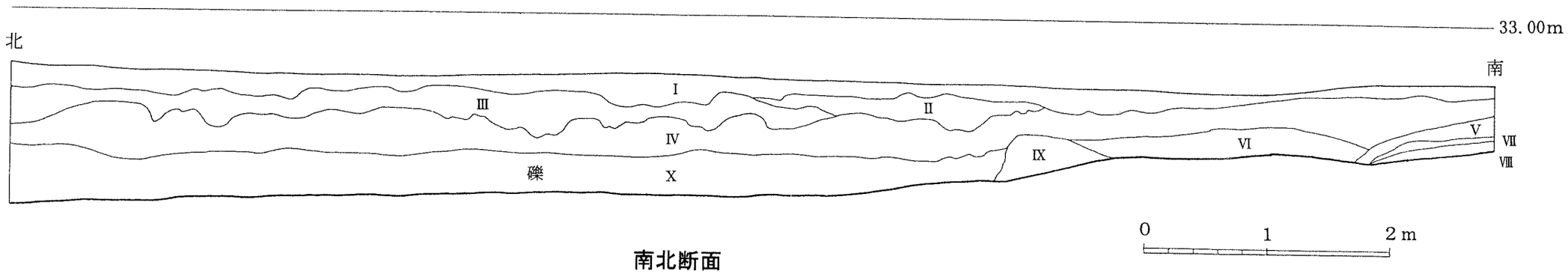
第５図　調査区上層遺物出土状況実測図



第６図　調査区下層遺物出土状況実測図



東西断面



南北断面

第７図　調査区土層断面実測図

平面図は上下２面（第５図、第６図）で作図しているが、おおむね上面には土器が多く散乱し、下面では木片が多く散乱している。出土の状況は人為的なものは見られず自然の流水による木片の出方を示している。

遺物（第８～11図）

第５・６図に見られるように調査区の南側に散在する形で遺物が出土している。自然遺物も含めて上下2層に遺物の出土を見ることが出来た。

土器の多くが河川の流れによって摩滅を受けており、木片の多くは自然遺物で人の手が加えられているものは少なかった。しかし明らかに木製品とされるものは、横櫛、木札、先端を尖らせた板、曲げ物の底板などがみられた。

遺物の多くは遺構に伴っていないため一括して取り扱った。

弥生式土器（第８図）（図版12）

１～３は甕の破片である。４～８は壷の破片で、9と10はジョッキ形土器の破片である。11は鉢の破片で12はミニチュア鉢の破片である。13は器台の破片である。14と15は出土地点が明確で図化した中では上層（第５図）に記載されている遺物である。14は大型壷の二重口縁部の破片で羽状に刻み目を入れている15は器台の破片である。16と17も下層（第６図）に記載された遺物で16は甕の口縁部で、17は袋状口縁部の破片である。

土師器（第9図）（図版14）

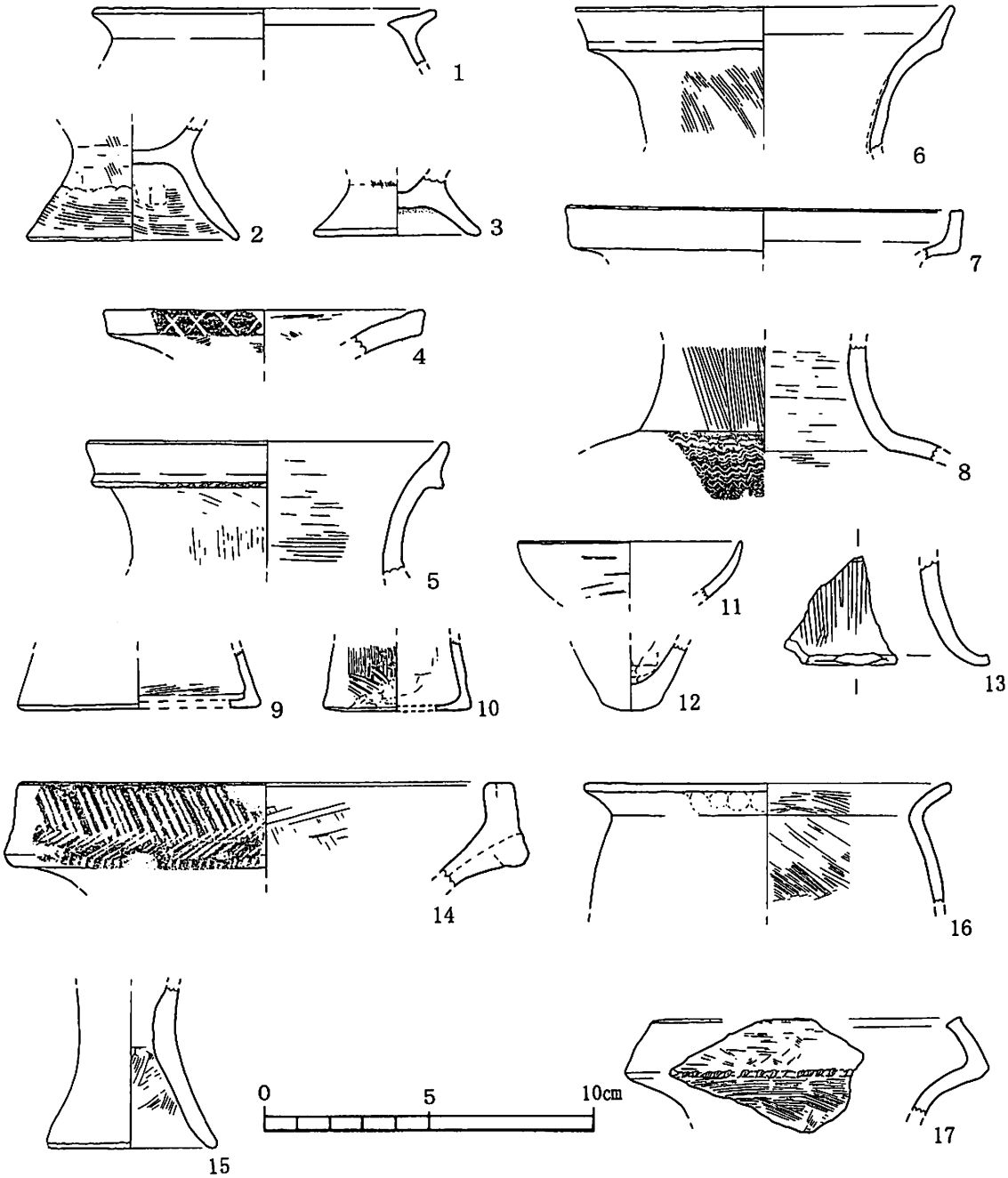
18～23は土師器である。18は古式の土師器で布留系の甕である。19は甕口縁部の破片である。20・21は高台付きの杯である。22は糸きり底の杯である。23は牛角把手である。

須恵器（第９図）（図版13・14）

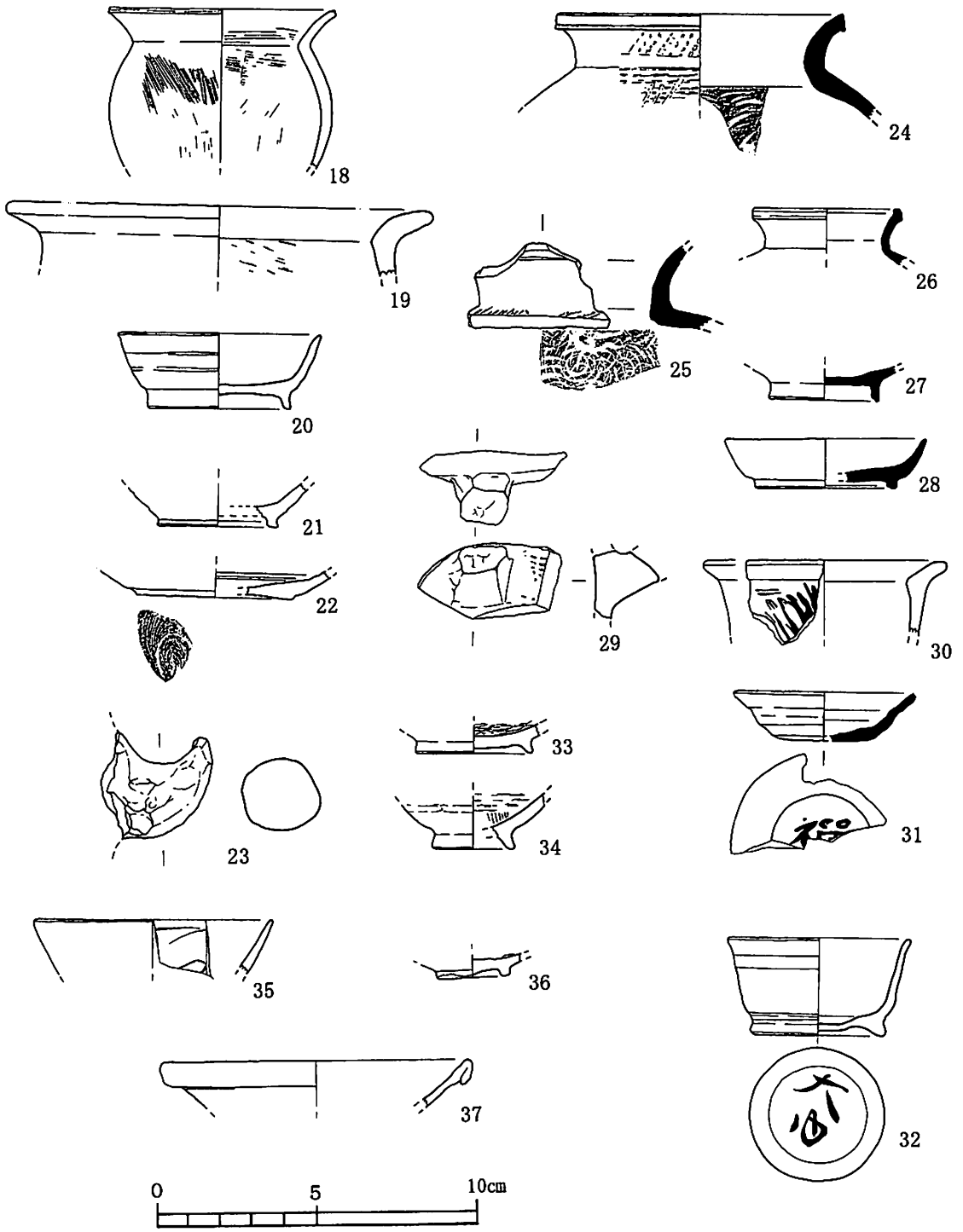
24～29は須恵器である。24～26は壷の口縁部である。27～28は高台付きの付きである。29は突起を持った須恵器で把手か脚か迷ったが、把手の可能性が高いと考えた。突起は削り出すように調整している。

墨書土器（第９図）（図版４）

30～32は墨書土器である。30は土師器の甕で、表面に筆先を整えるかのように墨を着けている。31は須恵器の付き底部に漢字で「禅」と書いている様である。類似した漢字として「禅」「褝」「禪」を考えたが、部首は「示」辺で、「衣」でないことと、つくりは「単」の旧書体であることから禅と判断した。「禅」には「地をはらって天地の神を祭る」



第８図　調査区出土遺物実測図（弥生式土器）



第９図　調査区出土遺物実測図（土師器・須恵器ほか）

意味がある。32は土師器の高台付椀で底部に「大内」と書いている。下の文字が「門」にも似ているが門構えにすると門のくずしは横に広くなるので、ここでは「内」と判断した。

黒色土器（第９図）（図版14－2）

33と34は黒色土器で表面をへら研磨で仕上げていた。

青・白磁（第９図）

35は龍泉窯系青磁椀口縁部の破片である。36と37は白磁で37は折り返し口縁部である。

特殊な遺物（第10図）（図版15）

38は把手である。表面に刺突文を施した把手で、これまでジョッキ形土器の把手と考えていたもので過去の調査でも再三出土している。今回詳細に観察してみると刺突文が２面のみであり、側面には３列、正面には７列に施文している。奇数の意味が謎として残るが、文様が見える部分に施される可能性が高いことから、同じ把手でも図に示すように水平方向に着いていたものと考える。

39～42は土錘である。菊池川に面していることもあって大小取り揃えているようである。

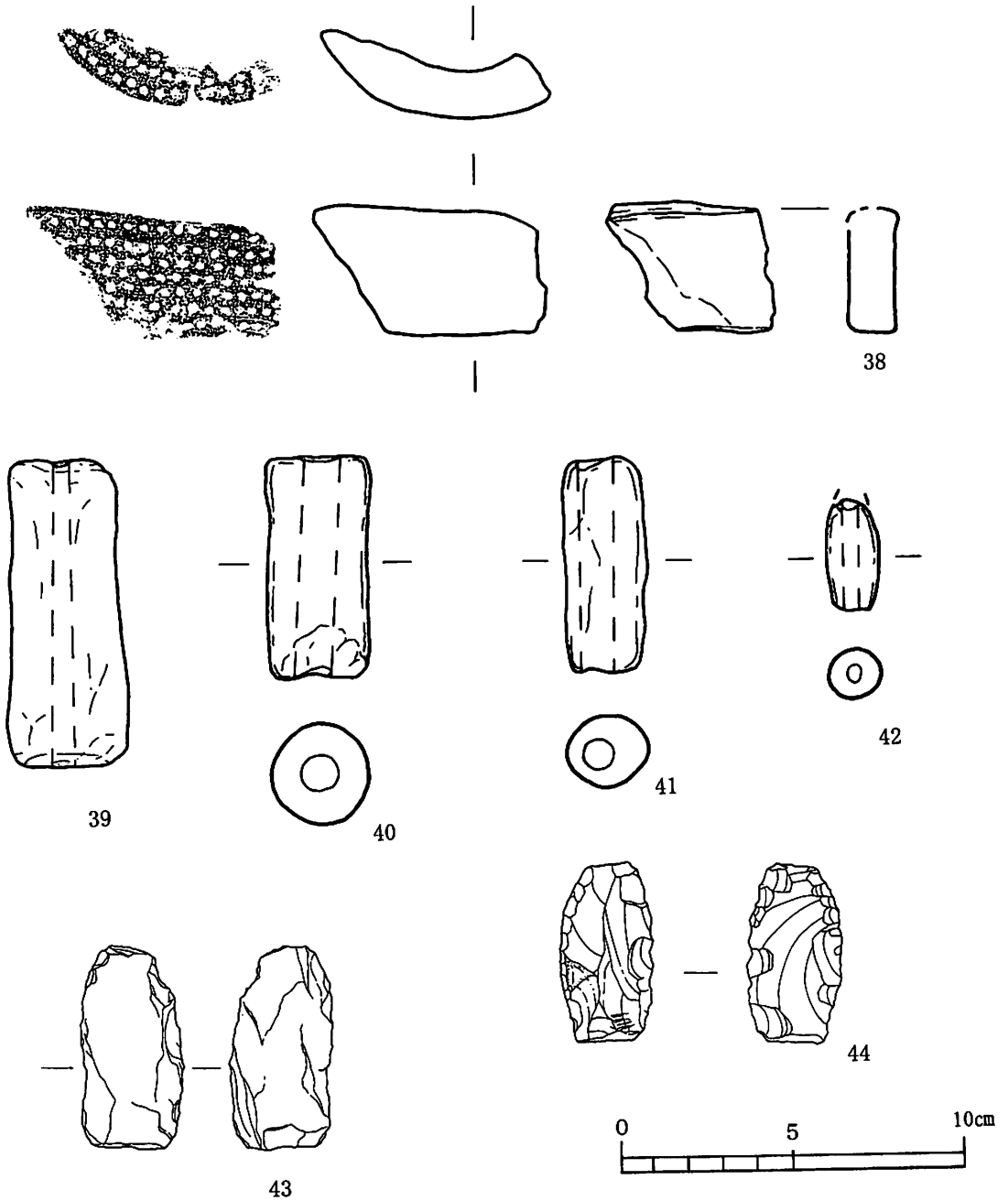
石器（第10図）（図版15・16）

43は変成岩製磨製石鏃の未製品である。44は主要剥離面を残す剥片でサイドに交互剥離による刃部を形成している。裏面には稜線を残した剥離で先端部も刃部の形成が見られない不定形の石器である。安山岩製。図版16－１と2は軽石で中央にくぼみを有している。用途は不明である。

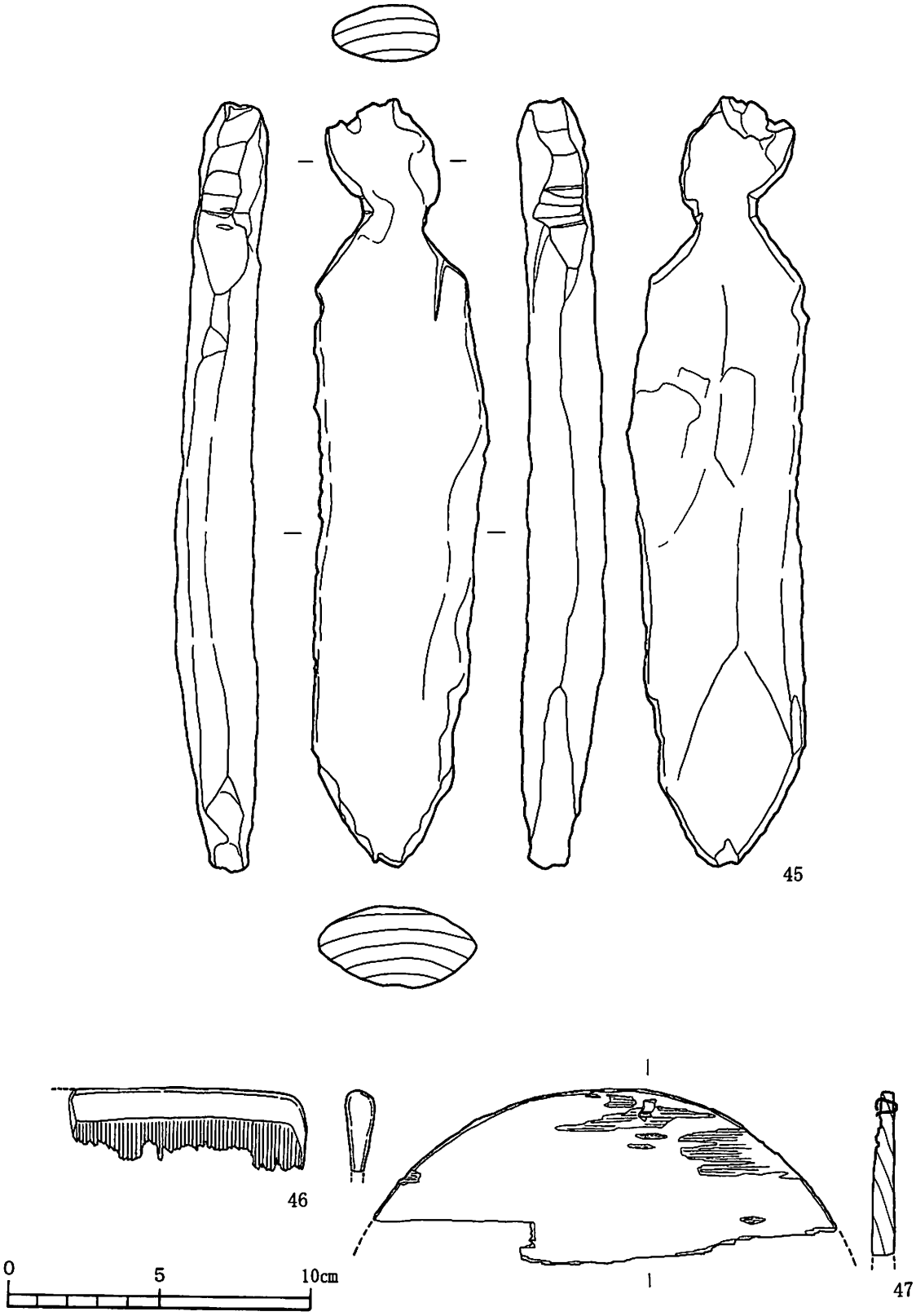
木製品（第11図）（図版３）

45はくびれと先端を尖らせた木札状の木製品である。木製人形の可能性も残している。46は横型の櫛で歯の先端を欠いている。47は曲げ物の底板で一部にとじ皮が残っている。

復元直径は17.6センチ程度になる。いずれも材質は明らかにしていない。



第10図　調査区出土遺物実測図（特殊な遺物・石器）



第11図　調査区出土遺物実測図（木製品）

方保田地区　出土遺物観察表

図番号	図No.	No.	遺構名	層序	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
1	13	1	一括	竹山の下より出土		甕	破片(口縁部　頸部　肩部)	20.6	−	主 Hue 10YR8/4 浅黄橙 一部Hue 10YR6/6 明黄褐	長石　石英 他(ウンモ　鉄分を含む粘土)	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	無	無	
2	5	1	P 一括			甕(脚台付)	破片(底部　脚部) 図面復元(有)	不明 底部径 12.6	不明	主 Hue 7.5YR6/3 にぶい褐	角閃石　長石　石英 他(ウンモ　鉄分を含む粘土)	良好	(底)タテハケ (脚)ヨコナデ ナナメハケ後ヨコナデ (脚底)ヨコハケ、ヨコナデ	(脚上)指ナデ ヨコハケ後指ナデ (脚底)ヨコハケ	無	無	・底部内器面には鉄分のにじんだ様な跡あり ・形はいびつで脚中央付近は粘土の盛り上がりが見られて付け加えたのではと思われる
3		3	一括			甕(脚台付)	破片(底部　脚部) 図面復元(有)	不明	不明	主 Hue 10YR7/3 にぶい黄橙 一部Hue N2/ 黒	角閃石　長石　石英	良好	(底)タテハケらしき跡 (脚)ヨコナデ	(底)指ナデ (脚)砂型 ヨコナデ	有	無	脚内器面に鉄分がしみ出た様な跡あり
4	6	1	P一括			壺	破片(口縁部) 図面復元(有)	196	不明	主 Hue 2.5Y6/2 灰黄 一部Hue N3/ 暗灰(黒斑)	角閃石　長石　石英 他(鉄分を含む粘土)	良好	斜格子文(口唇) ナナメハケ後行(口)	ナナメハケ後ナデ	有	無	
5	7	1	〃			壺	破片(口縁部　頸部) 図面復元(有)	21.6	不明	主 Hue 10YR6/2 灰黄褐 一部Hue 10YR8/4 浅黄橙	角閃石　長石 他(ウンモ　鉄分を含む土)	やや良好	(口)ヨコナデ、刻目 (頸)ナナメハケ タテハケ(?) 少し不明瞭	(口)ヨコナデ (口辺)ヨコハケ後ヨコナデ (頸)ヨコハケ	無	無	・刻目の部分の径を基にして反転復元 ・大部摩耗していて調整は不明瞭だがわずかに残っている
6	14	1	〃			壺	破片(口縁部)	22.4	−	主 Hue 10YR6/1 褐灰 一部Hue 10YR6/2 灰黄褐	角閃石　長石	良好	(口上・下端)ヨコナデ (口下)ナナメハケ	(口上)ヨコナデ 下は剥離の為不明瞭	無	有	
7		2	〃			壺	破片(口縁部)	24	不明	主 Hue 10YR8/2 灰白 一部Hue 10YR7/2 にぶい黄橙	角閃石　長石 他(鉄分を含む粘土)	良	摩滅の為調整不明瞭	摩滅の為調整不明瞭	無	無	
8		2	〃			壺	破片(頸部　肩部) 図面復元(有)	不明	不明	主 Hue 7.5YR4/3 褐 一部Hue 7.5YR5/4 にぶい褐	角閃石　長石　石英	良	(頸)タテハケ (肩)櫛格波状縁	(頸〜肩) 不明瞭だがヨコハケらしき跡	無	有	・鉄分が溶け出したような跡あり(内外) ・火を受けていてもろい感じ
9	9	1	〃			ジョッキ型土器	破片(胴部　底部) 図面復元(有)	不明 底部径 14.8cm	不明	主 Hue 10YR6/2 灰黄褐	角閃石　長石	良好	ナデ	(胴)ナデ (底)ヨコハケ	無	無	底部内器面に鉄分付着?
10	12	1	〃			ジョッキ型土器	破片(胴部　底部) 図面復元(有)	底部径 9.0	−	主 Hue 10YR7/2 にぶい黄橙 一部Hue 10YR6/1 褐灰	角閃石　長石	良	(胴)タテハケ (底)タテハケ後大きなナナメハケ	(胴)タテにナデ (底)ナデ	有	無	

図番号	図No.	No.	遺構名	層序	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
11		3	P一括			鉢	破片(口縁部 胴部)	13.6	不明	主 Hue にぶい橙 7.5YR6/4 一部Hue 褐灰 7.5YR5/1	他(緻密な粘土)	良好	ヨコナデ後ヘラ磨き	ヨコナデ	無	無	
12	14	2	一括			ミニチュア土製品	破片(胴部 底部) 図面復元(有)	—	—	主 Hue 黄灰 2.5Y6/1 一部Hue 黄灰 2.5Y5/1	角閃石 長石	良好	ナデ	指ナデ			ミニチュア?
13		2	P一括			器台	破片(底部) 図面復元(無)	不明	不明	主 Hue 灰黄褐 10YR5/2	角閃石 長石 他(ウンモ)	良好	(胴)タテハケ (底)ヨコナデ	ナデ	無	無	
14	4	1	東2−1		P−18	壺(大)	破片(口縁部) 図面復元(有)	30.0	不明	主 Hue にぶい黄橙 10YR7/2 一部Hue 灰白 10YR7/1	角閃石 長石 石英 他(ウンモ 鉄分を含む土)	良好	(口肩)ヨコナデ (口辺)斜格子紋 (頸)ナデ、ナナメハケ	(口)工具によるナナメハケ	無	無	・内器面に工具を当てた跡が明瞭に残る ・断面内に接合部がはっきりわかる資料である
15		2	〃		P−25	器台	破片(胴部 脚部) 図面復元(一部有)	不明 底部径 10.4	不明	主 Hue 灰黄 2.5YR7/2 一部Hue 黄灰 2.5Y5/1	角閃石 長石 石英	やや良好	・ナデ(柱) 摩滅の為不明瞭 ・ヨコナデ(裾)	ナデ (柱) ナナメハケ(柱) ヨコナデ(裾)	有	無	取手部 円の刺突文
16		3	東2−2		P−17	甕	破片(口縁部 頸部 肩部 胴部) 図面復元(有)	21.8	不明	主 Hue 灰黄褐 10YR5/2	角閃石 長石 石英 他(鉄分を含む土)	良好	(口肩)ヨコナデ (口辺)指おさえ後ナデ (頸)〜(胴上)少し摩耗しているがヨコナデ	(口辺)不明瞭だがヨコハケ (肩)ナナメハケ後ナデ (胴上)ナナメハケ	無	無	
17		2	〃		P−26	壺	破片(口縁部) 図面復元(無)	不明	不明	主 Hue にぶい黄橙 10YR7/2 一部Hue 褐灰 10YR4/1	角閃石 長石 石英 他(ウンモ 鉄分を含む土)	良好	(口肩)ヨコハケ 刻目 (口縁)摩耗しているがハケ目? (頸)ヨコハケ	(口上)ヨコナデ (口下)ヨコハケ	有	無	刻目の部分より頸をわり出した
18	5	3	P一括			甕(小)	破片(口縁部 頸部 肩部 胴部) 図面復元(有)	14.0	不明	主 Hue にぶい黄橙 10YR7/3 一部Hue 黒 N2/	長石 他(ウンモ)	良	(口〜頸)ヨコナデ (肩〜胴)ナナメハケ (胴下)不明瞭	(口)ヨコナデ ヨコハケ後ナデ (肩)ヨコハケ (胴)ナデ	有	有多し	鉄分のようなものが内外両面に多量についている
19			〃			甕(脚台付)	破片(口縁部 頸部 肩部) 図面復元(有)	25.8	不明	主 Hue 浅黄橙 7.5YR8/4 一部Hue 褐灰 7.5YR4/1	角閃石 長石 他(鉄分を含む土)	良好	(口)ヨコナデ (頸)ナデ	(口)ヨコナデ (頸)ヘラケズリ	無	有少し	
20		2	〃	竹山の下より出土		椀(土師器)	破片(椀部 高台) 図面復元(有)	12.6	4.25	主 Hue 灰白 2.5Y8/2 一部Hue 黄灰 2.5Y5/1	長石 他(鉄分を含む粘土 緻密)	良好	ヨコナデ	(体部)ヨコナデ (底)ヨコナデ後ナデ (高台)ヨコナデ (底)回転ヘラ削り	無	有	灯明皿?

図番号	図No.	No.	遺構名	層序	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
21	10	4	P一括			椀 土師 (ベンガラ？)	破片(底部 高台) 図面復元(有)	不明 底部径 7.6	不明	主 Hue にぶい褐 7.5YR6/3 明赤褐 (ベンガラ？) 一部Hue 5YR5/6	他(ウンモ 緻密な粘土)	やや良好	回転ナデ	回転ナデ(底) ナデ？(高台)	無	無	土師器
22	〃	3	〃			坏 土師器	破片(胴部 底部) 図面復元(有)	不明 底部径 9.6	不明	主 Hue 灰白 10YR7/1 一部Hue にぶい黄橙 10YR7/2	他(緻密な粘土)	やや良好	回転ナデ(坏) 回転糸切(底)	回転ナデ	無	無	土師器
23		4	一括			甑の把手	破片 図面復元(無)	－	－	主 Hue にぶい橙 7.5YR7/4 一部Hue にぶい黄橙 10YR7/2	角閃石 長石 他(鉄分を含む土)	良好	指ナデ 指紋の跡あり		無	無	指紋痕あり
24	11	1	〃			壺(須恵器)	破片(口縁部 頸部 肩部) 図面復元(有)	17.8	不明	主 Hue オリーブ灰 10Y4/2 一部Hue 褐灰 10YR4/1	他(緻密な粘土)	良好	(口)ヨコナデ (頸)タタキ後ナデ (肩)タタキ	(口～頸)ヨコナデ (肩)タタキ 青海波紋			須恵器
25		2	P一括			壺(須恵器)	破片(口縁部 頸部 肩部) 図面復元(無)	不明	不明	主 Hue 褐灰 10YR5/1	他(きめ細かな土)	良好	(口～頸)ヨコナデ (肩)タタキ	(口～頸)ヨコナデ (肩)青海波紋	無	無	・須恵器 ・内器面は青海波紋 ・内外ともに赤くやけた所がある
26	10	1	〃			壺(須恵器)	破片(口縁部 頸部 肩部) 図面復元(有)	9.2	不明	主 Hue 黄灰 2.5Y5/1 一部Hue にぶい橙 5YR6/3	他(緻密な粘土)	良好	回転ナデ	回転ナデ	無	無	須恵器
27		3	〃			坏 須恵器	破片(胴部 底部 脚部) 図面復元(有)	不明	不明	主 Hue 灰 N5/	他(きめ細かな土 鉄分を含む土)	良好	ヨコナデ	ナデ	無	無	・鉄分のようなもの付着 ・高台と坏の接合部にひびあり ・高台の底部は内側の角を削り取っている
28	3	1	東2－1		P－24	椀	破片(口縁部 胴部 底部) 図面復元(有)	12.8	3.05	主 Hue 灰 N6/	他(緻密な粘土)	良好	回転ナデ	回転ナデ(坏) ナデ(底)	無	無	
29	2		東1－2		P－31	須恵器取手	破片(取手) 図面復元(無)	／	／	主 Hue 灰 N6/	石英 他(鉄分を含む粘土 緻密な粘土)	良好	タタキ(平行文) ナデ(取手部)	ヘラケズリ	無	無	須恵器(取手)
30		2	P一括			甕 墨書土器	破片(口縁部 胴部) 図面復元(有)	15.4	不明	主 Hue にぶい黄橙 10YR6/3	角閃石 長石 石英 他(鉄分を含む粘土)	良好	ヨコナデ	ヨコナデ(口) ヘラ削り(胴)	無	無	胴部に墨で何か書いてある

図番号	図No.	No.	遺構名	層序	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
31	8	1	P 一括			坏 須恵器 墨書土器	破片(口縁部 底部) 図面復元(有)	11.6	3	主 Hue にぶい黄橙 10YR6/3 一部Hue 灰 7.5Y6/1	他(緻密な粘土)	良好	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	無	有	底部に"裡"の字(墨書)
32					P−28	坏 墨書土器	破片(口縁部 頸部 肩部 胴部 底部 脚部) 図面復元(有)	11.4	6.1	主 Hue にぶい橙 2.5YR6/4	他(精緻な胎土 鉄分を含む土)	良好	(口〜底)ヨコナデ	(坏〜底)ヨコナデ (底中央)ナデ 高台(ヨコナデ ヘラ切)	無	無	墨書土器 (大内)
33		3	一括			坏 黒色土器	破片(底部 脚部) 図面復元(無 一部有)	− 底部径 7.2	−	主 Hue 灰 N4/	石英 他(ウンモ 緻密な胎土)	良好	ヨコナデ	(底)ヘラミガキ (脚底)ナデ	無	無	黒色土器
34		2	〃			椀 黒色土器	破片(胴部 脚部) 図面復元(有)	− 底部径 5.0	−	主 Hue 暗灰 N3/	石英	良好	(胴)ヘラミガキ (底〜脚)ヨコナデ	(胴)ヘラミガキ	無	無	黒色土器
35	10	2	P 一括			椀 龍泉窯系青磁	破片(口縁部 胴部) 図面復元(有)	14.8	不明	主 Hue 灰 7.5YR6/1 一部Hue 灰オリーブ 7.5YR6/2	他(緻密な粘土)	良好	全体に釉薬	線模様 全体釉薬あり	無	無	青磁
36	14	3	一括			白磁椀	破片(胴部 底部 高台) 図面復元(有)	−	−	主 Hue 灰白 7.5YR2/1 一部Hue −	他(緻密)	良好	(体部〜高台)釉薬あり	(椀底)釉薬 (高台側底)ヘラ調整	無	無	白磁
37	〃	4	〃			白磁椀	破片(口縁部) 図面復元(有)	19.2	−	主 Hue 灰白 7.5Y8/1	他(緻密)	良好	全体に釉薬	全体に釉薬	無	無	白磁
38	3	3	東2−1		P−22	取手	破片 図面復元(無)	／	／	主 Hue 灰白 2.5Y8/2	角閃石 長石 他(鉄分を含む粘土)	やや良好	ナデ後刺突文(円の大きさ2ミリから2ミリ弱)	ナデ	無	無	取手部 円の刺突文
39	1		西1−1		P−4	土錘	図面復元(無)	3〜3.5	8.7	主 Hue にぶい黄橙 10YR7/2 一部Hue 黒褐(黒斑) 10YR3/1	角閃石 長石	良好	ナデ		有	無	重さ 117.2g
40	16	1	一括			土錘	ほぼ完形 図面復元(無)	最大巾 2.8	6.3	主 Hue 灰黄 2.5Y7/2 一部Hue 灰 N4/	長石 石英 他(ウンモ)	良好	指調整		有	無	穴の径 1.1cm 重量 61.0g

図番号	図No.	No.	遺構名	層序	P番号	器　種	部　位	口径	器高	色　　調	胎　　土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備　　考
41		2	一括			土錘	完形 図面復元(無)	最大巾 2.4	6.1	主 Hue にぶい橙 7.5YR6/4 一部Hue 灰 N5/	角閃石　長石　石英 他(ウンモ　鉄分を含む土)	良好	指調整		有	無	穴の径　1.0㎝ 重量　30.75g
42		3	〃			土錘	破片 図面復元(無)	最大巾 1.5	3.2	主 Hue にぶい橙 5YR6/4 一部Hue 灰黄褐 10YR5/2	角閃石　石英 他(鉄分を含む土)	良好	指調整		有	無	穴の径　0.45 重量　6.0g 上部少し欠損
43	15		〃			石製品		最大巾 3.05㎝	5.8 ㎝								重量　15.2g
44		3	P一括			サヌカイト 石鏃　未製品	図面復元(無)	最大巾 2.7	5.1								17.2g

6　日の出地区の遺構と遺物

山鹿市大字方保田2103番地の土地を調査対象とした。県道の南側で道路より1段下がった場所であり、三方が高くなっている状況である。長年水田としては機能しておらず、調査区西よりの北側斜面から湧き水がこんこんとでていた。そのため排水路の確保と土置き場の確保のため調査対象地区の東側に調査区を設定し、東西15m、南北10mの範囲を発掘することとした。

遺構

方保田地区より水分が少なく掘りやすいが、遺構の確認ができるかどうか大いに期待するところであったが、明確な畦畔などの遺構は検出できなかった。

基本的な層序は以下のとおりである。

Ⅰ層	表土層	15cm
Ⅱ層	褐色土層（鉄分含）	20cm
Ⅲ層	灰色土層	12cm
Ⅳ層	褐色土層（鉄分含）	15cm
Ⅴ層	灰色粘質土層	30cm
Ⅵ層	暗灰色粘質土層	28cm以上

遺物（第13～14図）

遺物の出土状況はすべて遺構に伴うものは見られず、各層で流れ込んだ状態のものばかりである。従って層序によって遺物に幾分の時間差を認める事が出来るが、河川敷に近いこともあって、氾濫により移動や堆積が行われた可能性も残しておることから層位別に扱った。

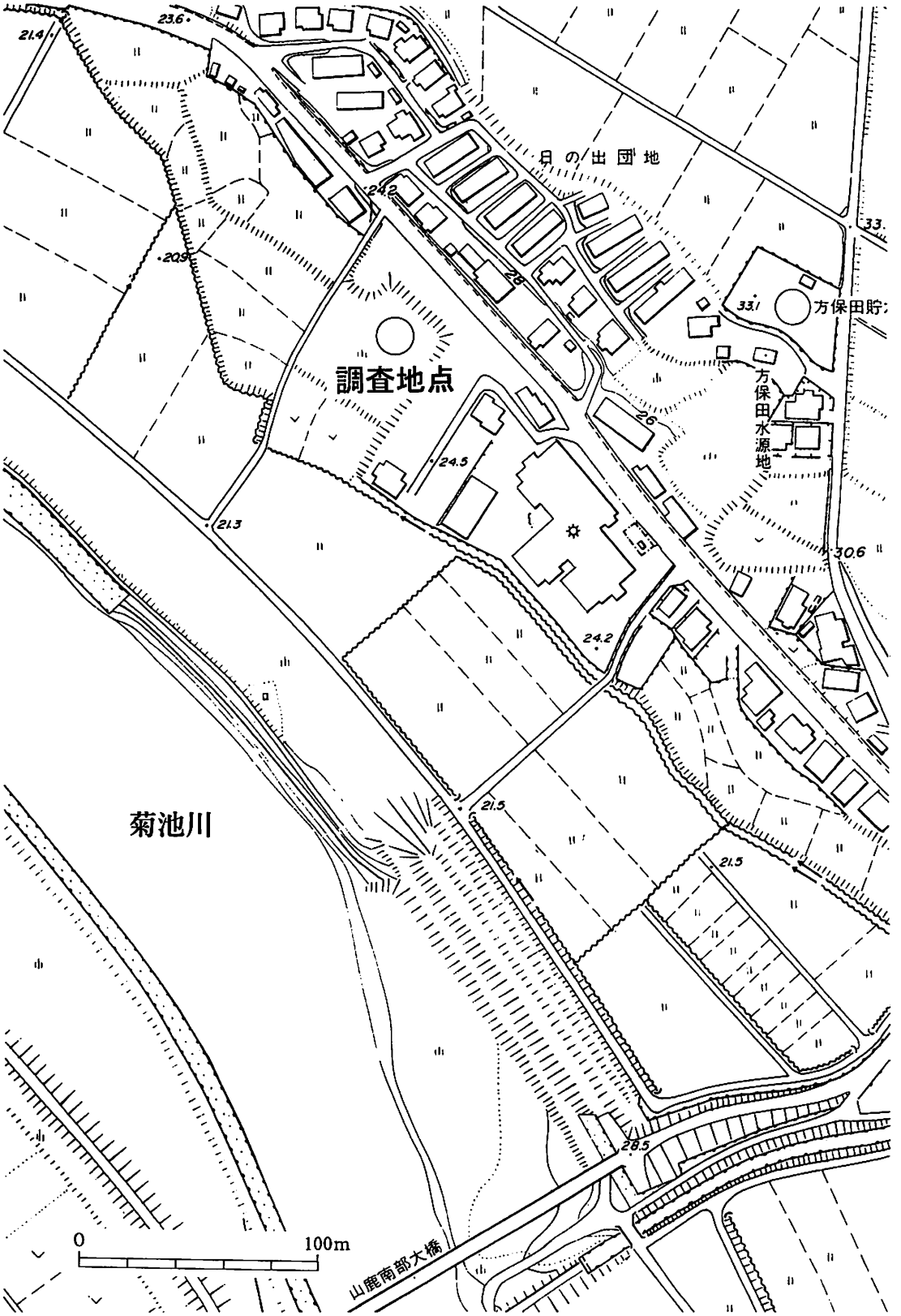
Ⅱ層の遺物（第13図）（図版４－３・19－１）

１は壷の底部片である。内面に赤色顔料の付着が見られる。２はジョッキ形土器の把手の破片である。３は甕の破片で２次的に線刻をおこなっている。４は瓦質土器の破片で火舎の口縁部である。表面には２個菊花文を施している。

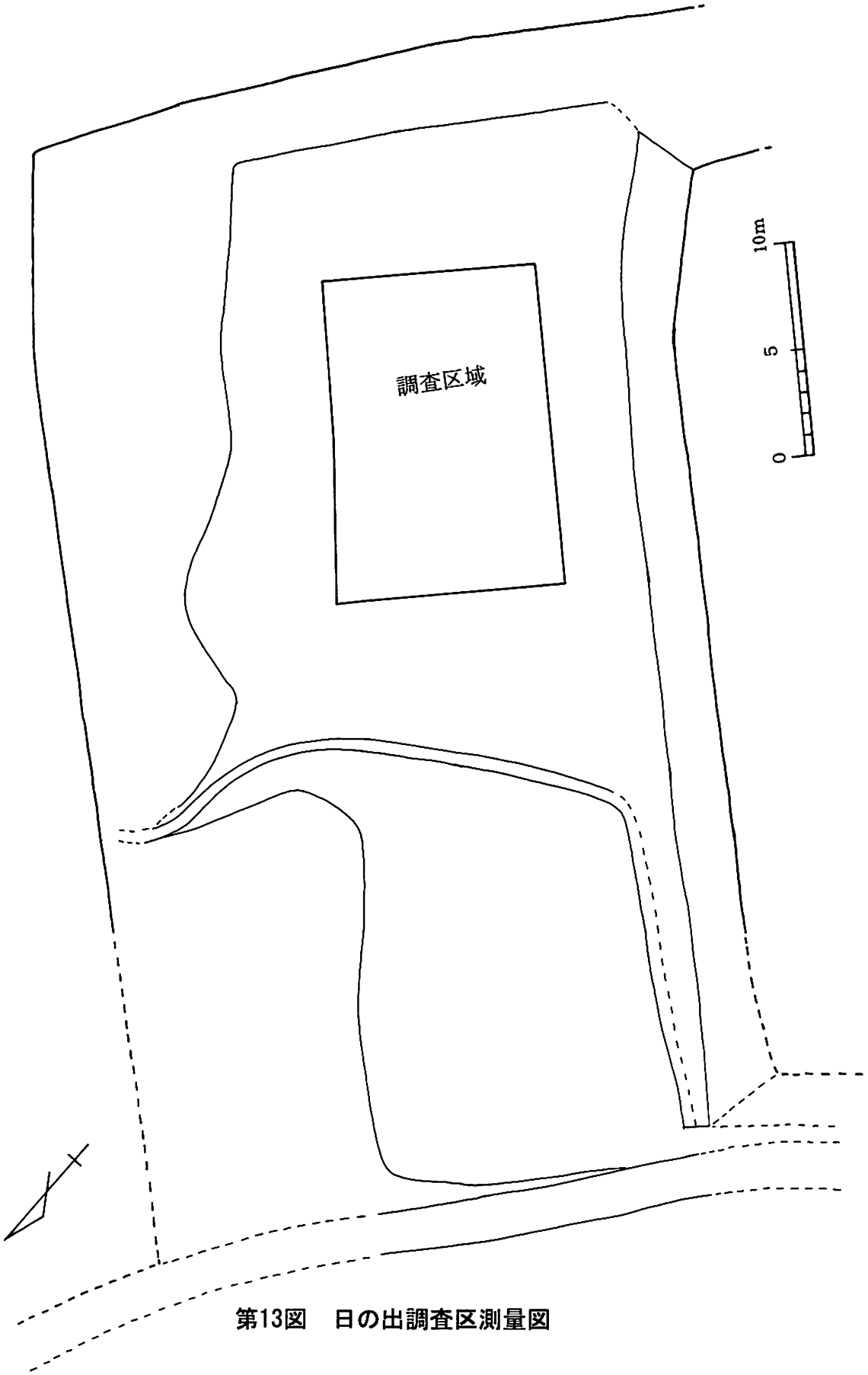
Ⅳ層の遺物（第13図）（図版19－2）

５は弥生後期の壷である。頸部から肩にかけての破片で、頸部に凸帯をめぐらしている。

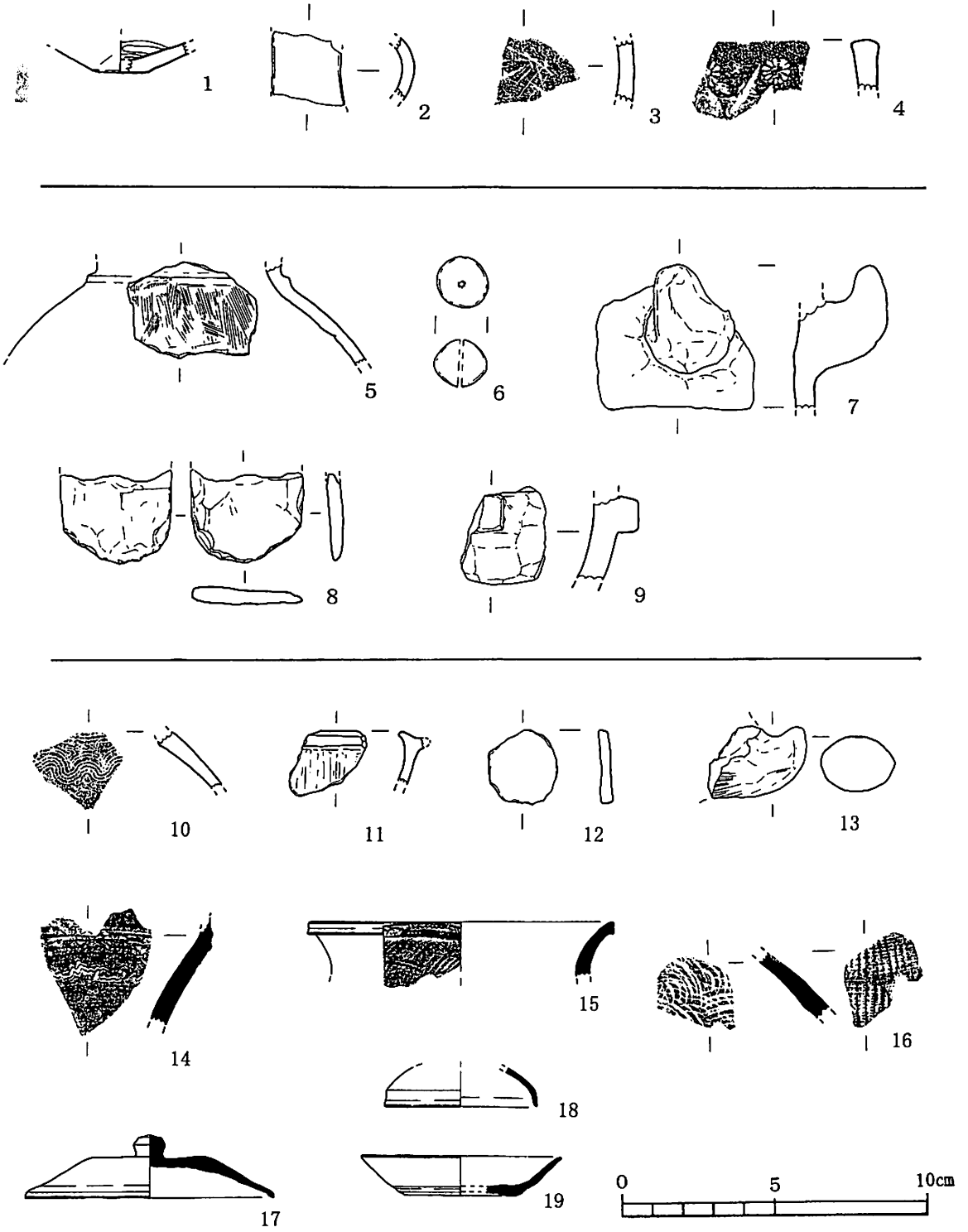
６は土製の玉で重さは26.7ｇである。７は土師器の甑の破片である。牛角把手が剥離し



第12図　日の出調査区地形図



第13図　日の出調査区測量図



第14図　調査区出土遺物実測図（Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ層出土）

ていた。８は変成岩の打製石斧の破片で使用痕として刃部に沿って摩滅が著しい。９は滑石製の石鍋の破片である。表面には四角の把手をつけ、粗い加工痕を残している。断面には２次的な研磨痕が見られることから、鍋の機能を失った後再使用された可能性が高い。

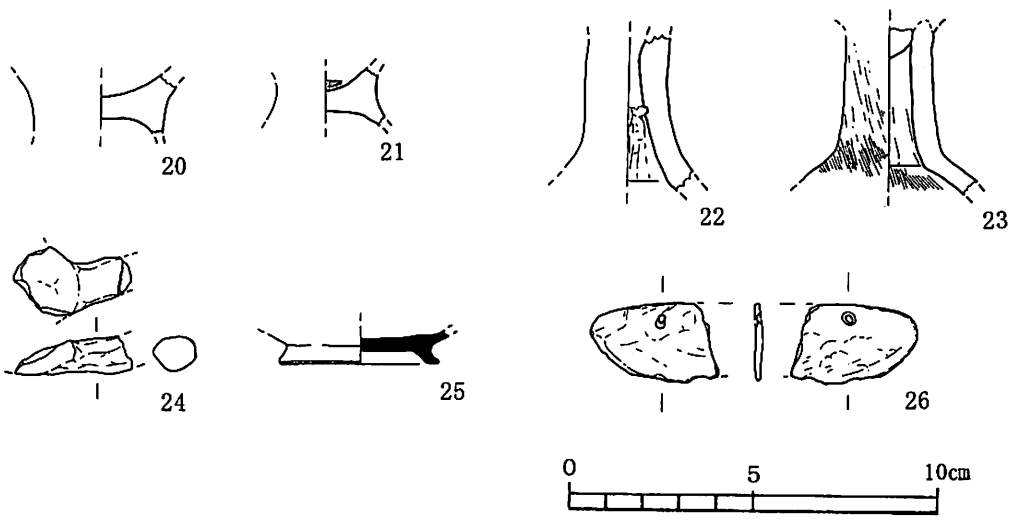
Ⅴ層の遺物（第13図）（図版19－3）

10は弥生後期の壷の破片で櫛描き文が明瞭に描かれている。11は特殊な口縁部の鉢である。他に例を知らないので何とも言えないが高杯の杯部にも見えるが断定はできない。12は弥生後期の土器片でメンコ状土製品である。再利用のため周囲を打ち欠いている。13は土師器の牛角把手である。14から17は須恵器で14～16は壷の破片で口縁部と胴部である。

17はつまみを有する杯蓋である。18はいわゆる赤焼け土器の杯蓋である。19は瓦質土器で杯の破片である。

Ⅵ層の遺物（第14図）（図版20）

20と21は弥生後期の甕の脚台である。22 と23は同じく弥生後期の高杯の脚である。24は土製スプーンの破片である。25は須恵器で高台付椀の底部である。26は石包丁の破片で、紐穴部分から折れている。残りの紐穴は片面からは2個の穴で、裏面は１個の穴で貫通している。



第15図　調査区出土遺物実測図（Ⅵ層出土）

日の出地区　出土遺物観察表

図番号	図No.	No.	遺構名	層序	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
1		2		2層		壺(赤色顔料(朱))	破片(底部) 図面復元(有)	－	－	主 Hue 10YR8/2 灰白 一部Hue N3/ 暗灰	角閃石　長石 他(ウンモ)	良好	ヘラ調整	ヘラミガキ	有	無	内器面に朱あり ただし、ヘラみがきの部分は薄い
2		3		〃		ジョッキ型の把手	破片 図面復元(無)	－	－	主 Hue 10YR8/2 灰白	角閃石　長石 他(赤褐色粒)	やや良好	ナデ	タテハケ後ナデ	無	無	
3		4		〃		線刻土器	破片 図面復元(無)	－	－	主 Hue 2.5YR6/4 にぶい橙	角閃石　長石 他(ウンモ)	やや良好	線刻あり	ナデ	有	無	線刻あり
4	6	1		2層		瓦器	破片 図面復元(無)	－	－	主 Hue 7.5Y6/1 灰 一部Hue 5Y6/1 灰	角閃石 他(緻密な粘土　赤褐色粒)	やや良好	ヨコナデ スタンプ文	ヨコナデ	無	無	スタンプ文あり
5	4	1		4層		壺	破片(頸部　肩部) 図面復元(有)	－	－	主 Hue 10YR7/3 にぶい黄橙	長石	良好	(頸)ヨコナデ (肩～胴)ナナメハケ	指おさえ後ナデ	無	無	
6		3		〃		土錘	完形 図面復元(無)	3.3 × 3.0		主 Hue 10YR6/3 にぶい黄橙 一部Hue 10YR4/1 褐灰	角閃石　長石	良好	ナデ				重量 26.6 g
7		2		〃		甕の把手	破片(把手)	－	－	主 Hue 10YR7/2 にぶい黄橙	長石　石英 他(鉄分を含む土)	良好	(把手)指調整 (胴)指ナデ	ヘラケズリ(胴)	無	有	
8	5	2		〃		石斧	破片 図面復元(無)	7.1 × 5.5									7.1×5.5(m) 重量 61.5 g
9	5	1		〃		石鍋	破片(胴部) 図面復元(無)	－	－								滑石製 表面より削り取った面がよくわかる
10		3		5層		壺	破片(肩部) 図面復元(無)	－	－	主 Hue 10YR6/3 にぶい黄橙	長石	良好	(肩)櫛描平行文 櫛描波状文 (胴)タテハケ	(肩～胴)ヨコハケ	無	無	

図番号	図No.	No.	遺構名	層序	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
11		6		5層		鉢	破片(口縁部) 図面復元(無)	−	−	主 Hue にぶい黄橙 10YR7/2	長石 石英	良好	(口)ヨコナデ (胴)タテハケ	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	無	無	珍しい器種。 はっきりわからないので高坏にしておいた
12		4		〃		再加工片	図面復元(無)	−	−	主 Hue 灰黄褐 10YR6/2 一部Hue 灰 N4/	角閃石 他(鉄分を含む土)	良好	摩耗している	摩耗している	有	無	
13		5		〃		甑の把手	破片(把手) 図面復元(無)	−	−	主 Hue にぶい黄橙 10YR7/2 一部Hue 黒 N2/	長石 他(鉄分を含む土)	良好	指調整 本体との接合部にヨコハケが残る	指調整 本体との接合部にヨコハケが残る	無	無	オレンジ色あり
14	3	1		〃		壺(須恵器)	破片(口縁部) 図面復元(無)	−	−	主 Hue 紫灰 5RP5/1 一部Hue 暗紫灰 5P4/1	他(鉄分を含む土 精緻な胎土)	良好	ヨコナデ後 櫛描波状紋	ヨコナデ	無	無	
15	2	4		〃		壺(須恵器)	破片(口縁部) 図面復元(有)	19.8	不明	主 Hue 灰 N6/	他(精緻な胎土)	良好	(口層)ヨコナデ (口)ナナメハケ後 ヨコナデ	ヨコナデ	無	無	
16		2		〃		壺(須恵器)	破片(肩部) 図面復元(無)	−	−	主 Hue にぶい橙 7.5YR7/4	他(鉄分を含む土 精緻な胎土)	良好	タタキ	青海波状文	無	無	
17	2	1		〃		坏蓋 須恵器	破片(頭頂部 胴部 底部) 図面復元(有)	16.0	4.1	主 Hue 灰 N6/	他(精緻な胎土)	良好	ヨコナデ	ヨコナデ 中央部はナデ	無	無	
18		3		〃		坏蓋 須恵器	破片(胴部) 図面復元(有)	10.0	−	主 Hue 褐灰 10YR6/1 一部Hue にぶい黄橙 10YR7/4	他(精緻な胎土)	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	無	無	
19		2		〃		坏身 須恵器	破片(口縁部 胴部 底部) 図面復元(有)	12.8	2.6	主 Hue 灰白 N7/ 一部Hue 灰 N4/	石英 他(精緻な胎土)	良好	ヨコナデ? 摩耗していて不明瞭	ヨコナデ? 摩耗していて不明瞭	有	無	口縁部全体が黒斑
20	1	1		6層	P−6	甕(脚台付)	破片(脚部) 図面復元(一部有)	−	−	主 Hue にぶい橙 5YR7/4 一部Hue 灰白 10YR7/1	長石 石英 他(鉄分を含む土)	良	ヨコナデ やや不明瞭	ナデ やや不明瞭	無	無	摩耗していて不明瞭 受熱している

図番号	図No.	No.	遺構名	層序	P番号	器　種	部　位	口径	器高	色　　調	胎　　土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備　　考
21		2		6層	P－4	甕(脚台付)	破片(脚部) 図面復元(一部有)	－	－	主 Hue 10YR7/1 灰白	角閃石　長石 他(鉄分を含む土　ウンモ)	良	ヨコナデ	(内底)ハケ後指調整 (外底)ナデ やや不明瞭	無	無	摩耗していて不明瞭
22		3		〃	P－3	高坏	破片(脚部) 図面復元(一部有)	－	－	主 Hue 7.5YR8/2 灰白 一部Hue N4/ 灰	角閃石　長石 他(鉄分を含む土　ウンモ)	良	ナデ？ やや不明瞭	(上)ナデ (下)ヘラ調整 やや不明瞭	無	無	
23		4		〃	P－5	高坏	破片(脚部) 図面復元(一部有)	－	－	主 Hue 10YR8/3 浅黄橙	長石　石英 他(鉄分を含む土)	良好	(柱～脚)ナナメハケ (柱)ヘラ調整	(脚)ナナメハケ	無	無	
24		6		〃	P－1	手捏土製品 スプーン	破片 図面復元(無)	－	－	主 Hue 10YR7/2 にぶい黄橙	長石　石英	良好	指調整	指調整	無	無	従来のものより大きく身の部分が浅い
25		5		〃	P－3	坏　須恵器	破片 図面復元(一部有)	－	－	主 Hue N7/ 灰白	他(灰白の石粒　精緻な胎土)	良好	ヨコナデ	(底)指ナデ ヨコナデ (高台)中心はヘラ切 回転ヨコナデ	無	無	
26		7		〃	S－1	石包丁											重量　17.5g

7　まとめ

今回の調査では水田遺構の確認はできなかった。しかし方保田地区では旧河床の確認ができ、古環境の復元に役立つ材料を得る事が出来た。また将来的には古代も含めて木製品の出土が望める事が明らかになった。周辺を調査すれば弥生時代の水田や木器が出土する可能性を残している。

日出地区では比較的安定した層序が見られたが、畦畔などの遺構は見られず層位的には遺物も徐々に古くなっていく傾向にあるが、明確に層位の時期を決定できるものは得られなかった。ましてや、水田遺構に伴うものは残っておらず、今日でも水田には小石の一個も入れない状態で田植えなど行っており、耕作の邪魔になるから捨てられる運命である。このため、今回の調査では思うような成果は得られなかった。

いずれも湧き水の対応に苦慮したため思うような作業の進行ができなかったことと、緊急調査が隣接した場所で行わなければならず、調査体制の不備と調査量のバランスが取れない状況であった事もひとつの要因である。

博物館では展示活動を行い、その間に発掘調査をこなしている現状では、遺物整理の体制まではとても追いついていないのである。人と金の問題でもあるが人材の確保が最低限の課題である。

図　版

方保田地区

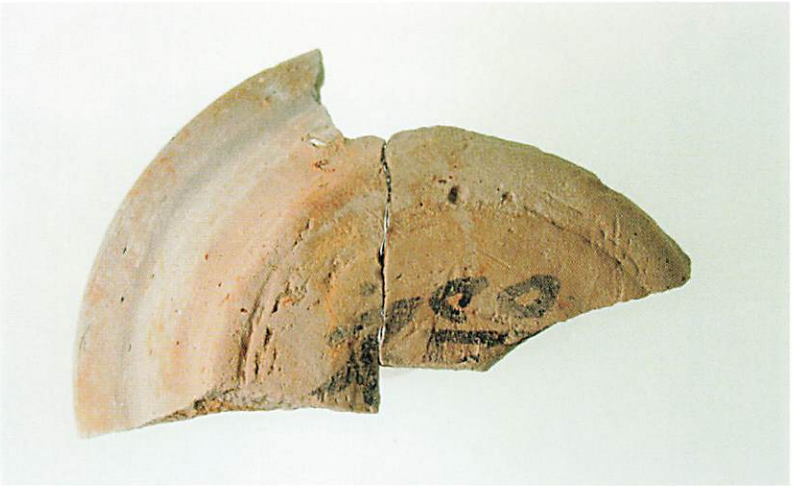
1　方保田地区調査区遠景（西側より）

2　調査区遠景（北側より）

3　調査区発掘状況

方保田地区

1　墨書土器



2　墨書土器

3　墨書土器

方保田地区

1　木札

2　横櫛

3　曲物底板

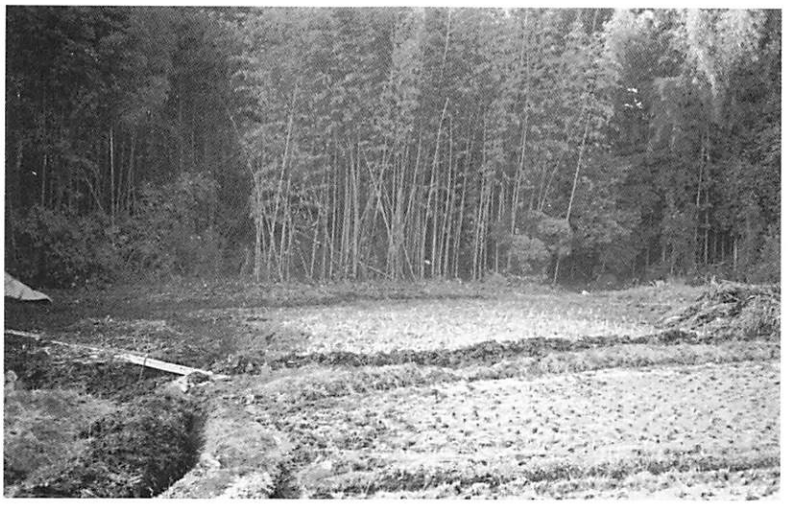
日の出地区

１　日の出地区調査区全景（東側より）

２　調査区発掘状況

３　内面に赤色顔料を塗った土器

方保田地区



1　方保田地区調査区全景（北側より）

2　調査風景（南東側より）

3　柵準備作業中

方保田地区

1　発掘調査風景

2　発掘調査風景

3　発掘調査風景

方保田地区

1　発掘調査風景

2　調査区西側土層状況

3　発掘状況

方保田地区

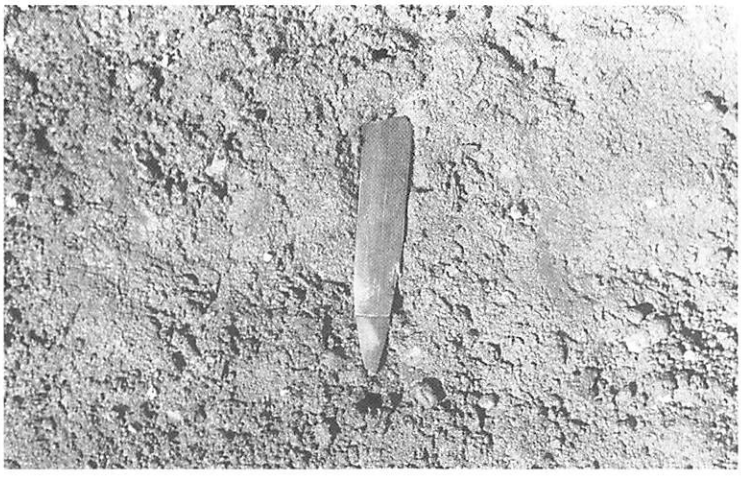
1　発掘状況

2　発掘状況

3　発掘調査風景

方保田地区

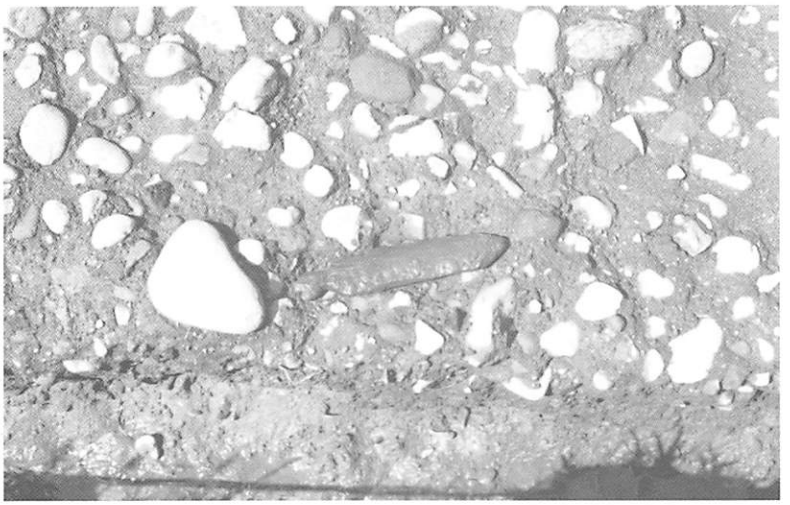
1　土錘出土状況



2　木札出土状況

3　木札出土状況

方保田地区



1　木札出土状況

2　木札出土状況

3　木札出土状況

方保田地区

1　横櫛出土状況

2　木片出土状況

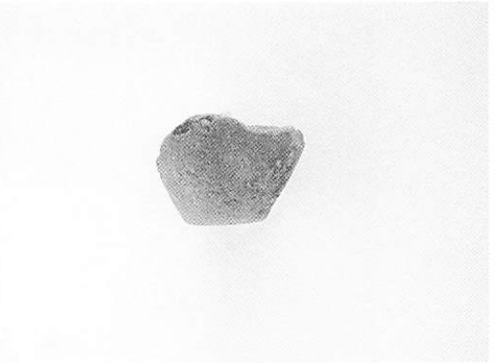
3　木片出土状況

方保田地区

1　上層出土　弥生式土器・壷口縁部

2　上層出土　弥生式土器・壷、甕片

3　上層出土　弥生式土器・器台片



4　上層出土　弥生式土器・ミニチュア鉢

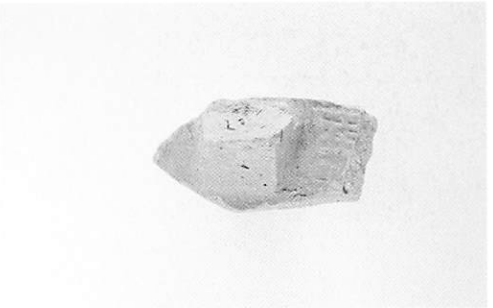
方保田地区

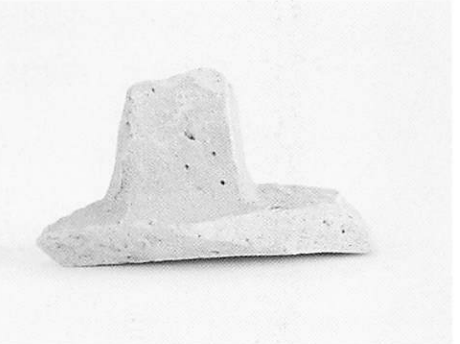
1　下層出土　弥生式土器・甕口縁部片

2　下層出土　弥生式土器・壷口縁部片

3　土師器　杯

方保田地区

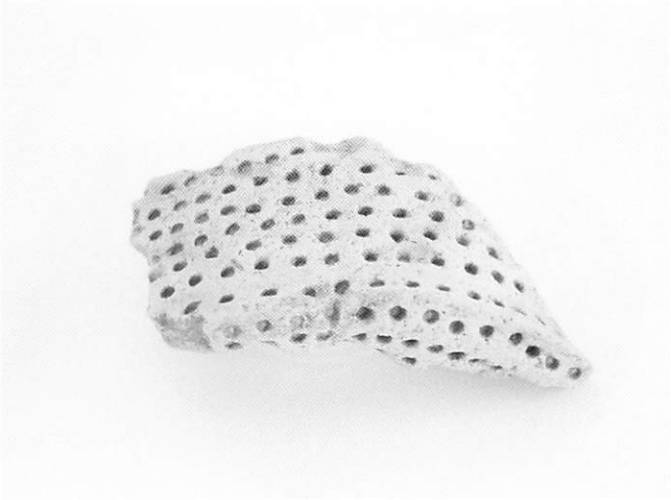




1　須恵器　把手

2　土師器、須恵器、白磁

方保田地区



1　刺突文を有する把手

2　土錘

3　土錘

4　土錘

5　石器

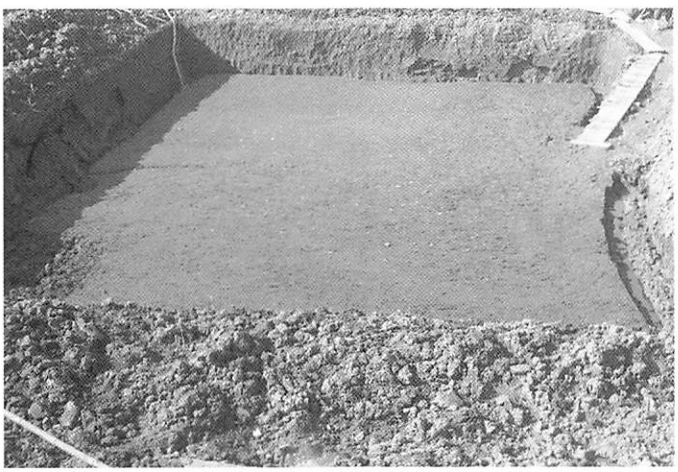
方保田地区

1　くぼみを有する軽石

2　くぼみを有する軽石

日の出地区

1　日の出地区発掘状況

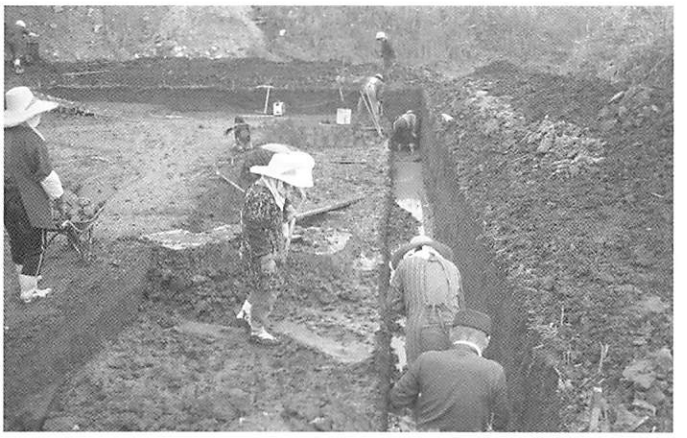


2　発掘状況

3　発掘状況

日の出地区

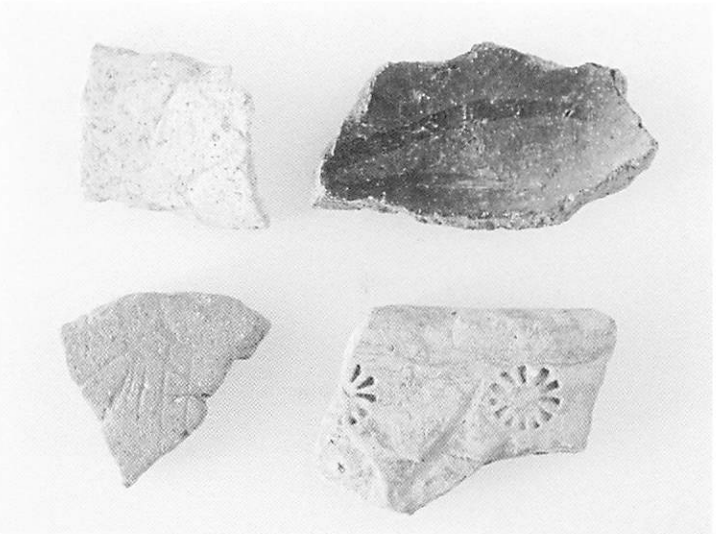
1　発掘調査風景



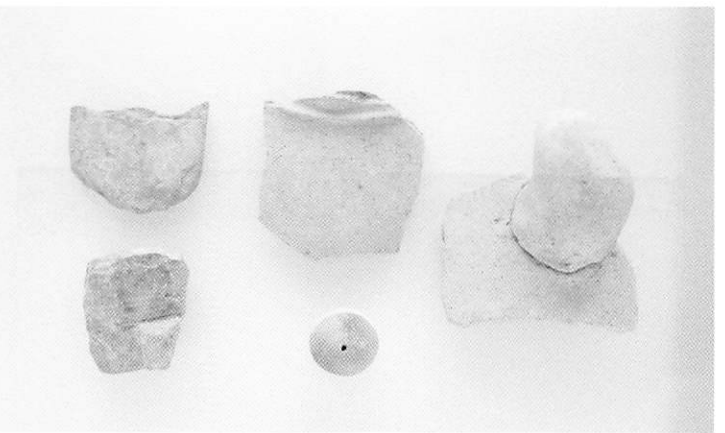
2　発掘調査風景

3　発掘調査風景

日の出地区



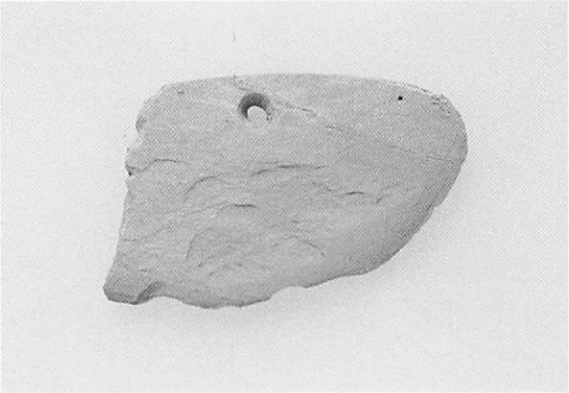
1　第２層出土遺物



2　第４層出土遺物

3　第５層出土遺物

日の出地区



第６層出土遺物

山鹿市立博物館調査報告書　第11集

市内遺跡確認調査

平成３年３月31日

編　集　山鹿市立博物館
〒861-0541 熊本県山鹿市大字鍋田2085

発　行　山鹿市教育委員会
〒681-0501 熊本県山鹿市大字山鹿1026－2

印　刷　熊本県印刷センター
〒862-8011 熊本県熊本市鹿帰瀬町496－1

正誤表

『市内遺跡確認調査(水田遺構確認調査)』 山鹿市立博物館調査報告書 第11集 熊本県山鹿市教育委員会1991年

本文中

頁	行	図番	誤	正
1	29		廃土作業行っても	廃土作業を行っても
2	6		焼く20cm	約20cm
21	11		(図版12)	(図版12・13)
21	15		刻み目を入れている15は器台の…	刻み目を入れている。15は器台の…
21	17		(図版14)	(図版13・14)
21	19		20・21は高台付きの杯である。22は糸きり底の杯である。	20・21は高台付きの坏である。22は糸きり底の坏である。
21	20		(図版13・14)	(図版14)
21	21		高台付きの付き	高台付きの坏
21	24		(図版4)	(図版2)
21	26		須恵器の付き	須恵器の坏
22・23		第8・9図	(スケール1/2) 数値 0 5 10cm	(スケール1/4) 数値 0 10 20cm
32	17		遺物(第13～14図)	遺物(第14～15図)
32	22		Ⅱ層の遺物(第13図)	Ⅱ層の遺物(第14図)
32	26		Ⅳ層の遺物(第13図)	Ⅳ層の遺物(第14図)
35・36		第14・15図	(スケール1/2) 数値 0 5 10cm	(スケール1/4) 数値 0 10 20cm
36	5		Ⅴ層の遺物(第13図)	Ⅴ層の遺物(第14図)
36	7		高杯の杯部	高坏の坏部
36	11		杯蓋 (2ヶ所)	坏蓋 (2ヶ所)
36	12		杯の破片	坏の破片
36	13		Ⅵ層の遺物(第14図)	Ⅵ層の遺物(第15図)
36	14		高杯の脚	高坏の脚

土器観察表

頁	図番号	誤	正
27	3	図No.:記載漏れ	図No.:11
27	7	図No.:記載漏れ	図No.:6
27	8	図No.:記載漏れ	図No.:11
28	11	図No.:記載漏れ	図No.:6
28	13	図No.:記載漏れ	図No.:9
28	15	図No.:記載漏れ	図No.:3
28	15	備考:取手部 円の刺突文	備考:記載事項削除
28	16	図No.:記載漏れ	図No.:4
28	17	図No.:記載漏れ	図No.:4
28	17	備考:刻目の部分より頸をわり出した	備考:刻目の部分から径を割り出した
28	19	図No.・No.:記載漏れ	図No.:5、No.:2
28	19	器種:甕(脚台付)	器種:甕
28	20	図No.:記載漏れ	図No.:13
28	20	器種:椀 部位:破片(椀部 高台)	器種:坏 部位:破片(坏部 高台)
29	21	器種:椀	器種:坏
29	23	図No.:記載漏れ	図No.:12
29	25	図No.:記載漏れ	図No.:7
29	27	図No.:記載漏れ	図No.:7
29	27	部位:破片(胴部 底部 脚部)	部位:破片(底部 高台)
29	28	器種:椀、部位 破片(口縁部 胴部 底部)、内器面:空欄	器種:坏 須恵器、部位:破片(口縁部 胴部 底部 高台)、内器面 (高台)回転ヘラケズリ
29	30	図No.・器種:記載漏れ	図No.:8 、 器種:土師器
30	31	部位:破片(口縁部 底部)	部位:破片(口縁部 胴部 底部)
30	32	図No.:記載漏れ、器種:坏 部位:破片(口縁部 頸部 肩部 胴部 底部 脚部) 外器面調整:(口～底部)ヨコナデ 内器面調整: (坏～底)ヨコナデ、(底中央)ナデ、高台(ヨコナデ ヘラ切)	図No.:17、器種:椀 墨書土器 部位 破片(口縁部 胴部 底部 高台) 外器面調整:(口～高台)ヨコナデ 内器面調整: (口～底)ヨコナデ、(底中央)ナデ、(高台)ヨコナデ 中央ヘラ切
30	33	図No.:記載漏れ 部位:破片(底部 脚部) 内器面調整:(底)ヘラミガキ (脚底)ナデ	図No.:12 部位:破片(底部 高台) 内器面調整: (底)ヘラミガキ、(高台)ヨコナデ 中央ナデ

土器観察表

頁	図番号	誤	正
30	34	図No.:記載漏れ 部位:破片(胴部　脚部)	図No.　12 部位:破片(胴部　底部　高台)
		外器面調整:(胴)ヘラミガキ、(底～脚)ヨコナデ 内器面調整:(胴)ヘラミガキ	外器面調整:(胴)ヘラミガキ　(底～高台)ヨコナデ 内器面調整:　(胴～底)ヘラミガキ、(高台)ヨコナデ
30	36	図No.:記載漏れ	部位:破片(底部　高台)
30	36	外器面　(体部～高台)釉薬あり	外器面　(底部～高台)釉薬あり
31	41	図No.:記載漏れ	図No.:16
31	42	図No.:記載漏れ	図No.:16
31	43	遺物名:石製品、備考:空欄	遺物名:磨製石鏃未製品、備考:変成岩製
31	44	図No.:記載漏れ、遺物名:サヌカイト石鏃未製品、備考:空欄	図No.:8、遺物名:剥片、備考:安山岩製
37	1～3	図No.:記載漏れ	図No.:6
37	6	図No.:記載漏れ	図No.:5
37	7	図No.:記載漏れ	図No.:4
37	10	図No.:記載漏れ	図No.:3
38	11～13、16	図No.:記載漏れ	図No.:3
38	15	外器面調整:(口層)ヨコナデ	外器面調整:(口唇)ヨコナデ
38	16	部位:破片(肩部)	部位:破片(胴部)
38	18、19	図No.:記載漏れ	図No.:2
38	18	器種:坏蓋　須恵器、部位:破片(胴部)	器種:坏蓋　赤焼け土器、部位　破片(口縁部　胴部)
38	19	器種:坏身　須恵器	器種:坏身　瓦質土器
39	21～26	図No.:記載漏れ	図No.:1
39	23	外器面調整:(柱～脚)ナナメハケ(柱)ヘラ調整、内器面調整:(脚)ナナメハケ	外器面調整:(柱～脚)ナナメハケ、内器面調整:(柱)ヘラ調整　(脚)ナナメハケ

図版

14	2	土師器、須恵器、白磁	弥生式土器、土師器、須恵器、白磁

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

　この電子書籍は、『山鹿市立博物館調査報告第 11 集　市内遺跡確認調査報告書』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。
　底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。
　なお、平成 17 年（2005）に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：山鹿市立博物館調査報告第 11 集　市内遺跡確認調査報告書
発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3
電話： 0968-43-1651
URL：https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/

電子書籍制作日：2025 年6月 26 日